

公立大学法人 滋賀県立大学

「近江楽座」

2019年度 活動報告書

近江楽座は「学生らしさを生かして、地域に学び、育ち、貢献できる場」を目指しています

はじめに

地域の新しい日常・ニューノーマル

2019年度の終盤から世界を襲った災いは、それまでの日常を大きく変えていくことになった。人の移動や対面するコミュニケーションを自制した生活は、これまで学生たちが当たり前のように過ごしてきた大学での生活や、地域での活動ができなくなるということだった。地域に寄り添うという言葉がこれほどまでに重く感じたことはない。現場で活動してきた近江楽座の取り組みが、傍観者のような意識になり、顔が見えない不安を感じるようになってきたのだ。遠隔の活動に実感を持たず、腑に落ちなくなっている。居住地と活動地域が離れているということは、元々学生たちに戸惑いはないはずだ。しかし、離れた場所から地域に寄り添うという日常は想像できない。そんな新しい日常とはなんだろう。ニューノーマルと呼ばれた時代はこれまでもあった。第一のニューノーマルはITが社会システムとなる変革の時に言われていた。第二のニューノーマルは、リーマンショック後、経済の持続社会への変革の時だった。そして今、第三のニューノーマルは、移動を制限して人同士の接触機会を減らす新しい生活様式への変革である。これまで、バブル世代と呼ばれた学生たちがいた。ゆとり世代と呼ばれた学生たちがいた。現在の状況を頑張っただけで過ごしている学生たちは、今後コロナ世代と呼ばれるだろう。時代で変化していくことに一喜一憂することなく、普遍的（ノーマル）な活動を息長く続けることが地域活動である。そこにはしっかりとした考え方と理念は必要だが、紋切り型のノウハウは必要ない。時代と共に学生たちが創り出す自由で多様なメッセージは、すこぶる新鮮で、私たちの未来を探るヒントが満載だ。

学生の役割とはなんだろう。何歳になっても地域での役割はある。学生たちは自分たちが成長していくための過程として、寄り道のような感覚で地

域に入っていく。地域のためにと考えていた正義感が、実は自分のためだったことに気づく。それが最後はみんなのために変わっていく。そんな好循環が生まれる日常がノーマルであって欲しい。

この報告書は2年前から1年前までの学生たちの成果を振り返っている。その後現在までの1年間で、誰も想像もしなかった惨状の世界を私たちは目にしている。それまでの日常がどれだけ自由だったのか、そのノーマルな豊かさを改めて感じている。学生たちの日常は、そんな渦中であっても大学生生活に自粛はない。どんな形であっても学ぶための可能性を探している。それは地域活動でも同様だ。祭り、イベント、集会といったハレの時間だけが地域の日常ではない。静かな普段の日常への眼差しを鍛えていく1年であって欲しい。新しくはないかもしれないが、当たり前の日常、それをニューノーマルと呼びたい。

近江楽座の取組で、地域と共に過ごした体験は、懐かしい日々の記憶として残るはずだ。その記憶の中から既視感のある日常を感じるものが郷愁なのかもしれない。滋賀県立大学は、地域に根差したふるさとのような大学でありたい。

2021年2月

近江楽座専門委員会委員長

印南比呂志

(人間文化学部 生活デザイン学科)

目次

	はじめに	1
1	近江楽座について	5
	1-1 近江楽座とは	6
	1-2 プロジェクト区分	7
	1-3 プロジェクトの採択について	8
2	各プロジェクトからの活動報告	11
	2-1 活動実績報告	12
	2-2 『らくざしんぶん』	56
3	共通プログラムの報告	63
	3-1 活動の安全確保のためのスキルアップ講座	64
	3-2 キャンパス SDGs びわ湖大会 ～地域から生まれる新しい価値～	66
4	学生有志活動	69
	4-1 近江楽座 合同説明会「楽座市」	70
	4-2 オープンキャンパス	72
	4-3 近江楽座チャレンジショップ	73
	4-4 イナズマロックフェス「おいで～な滋賀」体験フェア ブース出展	74
	4-5 B プロジェクト「県営開出今団地コミュニティ再生プロジェクト」	75
5	他大学等との交流	77
	5-1 LINKtopos2019 in Kochi	78
	5-2 スタディツアー〈下川町× JAL〉を実施	79
	5-3 びわ湖環境ビジネスメッセへの出展	80
	5-4 2019 地域活性化フォーラム in しが	81
	5-5 しがのふるさと支え合いプロジェクト 協定締結	82
	5-6 第9回毎日地球未来賞 奨励賞を受賞	83
6	情報発信	85
	6-1 ホームページ、プロジェクトレポート、リーフレット	86
	6-2 東洋経済 ACADEMIC SDGs に取り組む大学特集	87
7	付録	89
	7-1 プログラム推進メンバー	90
	7-2 メディア掲載一覧	91

1 近江楽座について

1-1 近江楽座とは

滋賀県立大学の「近江楽座」は、「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」を目的とする学生主体のプロジェクトを募集、選定し、全学的に支援する教育プログラムです。

2004年度に文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」に採択され、2006年度までの3年間の活動実績が大学発地域貢献の先進的な取組として学内外で高く評価されました。そして、翌2007年度からは大学独自の予算を用いてプログラムを継続し、2019年度までの16年間で延べ359のプロジェクトが地域と連携した活動を展開しています。

| 教育効果を高め、大学と地域の連携を深めるための3つの目標

- 地域の課題に学生・大学が取り組み、地域の活性化に向けて共に活動する。
- 学生が地域の方々と一緒に活動することにより、学内だけでは学べないことを体験する。
- 大学と地域が共同して、よりよい地域づくり・人づくりにつながるしくみをつくる。

| 3つのサポートシステム

近江楽座専門委員会・学生委員会・近江楽座事務局(地域共生センター)の連携の下、3つのサポートシステムにより、全学的に活動を推進しています。

■ 活動助成システム

「近江楽座」として選定されたプロジェクトの事業計画に基づき、活動に必要な事業費を審査し、助成します。

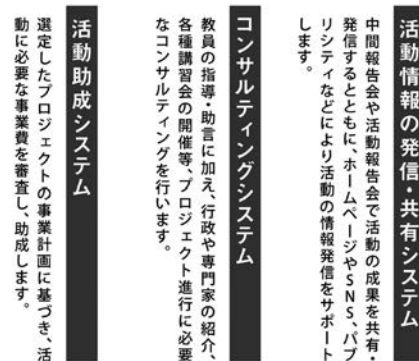
■ コンサルティングシステム

教員の指導・助言に加え、行政や専門家の紹介、各種講習会の開催など、学生がプロジェクトを進めていくために必要なコンサルティングを行います。

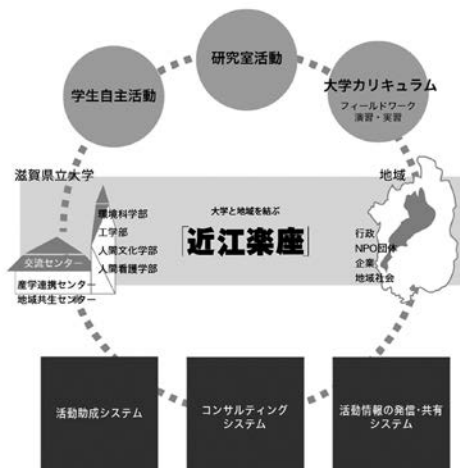
■ 活動情報の発信・共有システム

中間報告会や活動報告会で活動の成果を共有・発信するとともに、ホームページやSNS、パブリシティなどにより活動の情報発信をサポートします。

<3つのサポートシステム>



<サポートシステム概念図>



1-2 プロジェクト区分

2007年度より、「地域活性化への貢献」をテーマに学生主体の地域活動を行う「Aプロジェクト(学生主体型プロジェクト)」に加え、自治体や企業等から提示された課題について、学生主体のプロジェクトチームを結成し活動する「Bプロジェクト(地域協働型プロジェクト)」がスタートしました。

Ⅰ Aプロジェクト(学生主体型プロジェクト)

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動を4つの区分で募集し、支援するプロジェクトを選定しています。

① 継続プロジェクト

過去に近江楽座の助成を受けたことがあるプロジェクト。

② 新規プロジェクト

近江楽座の助成を受けたことがないプロジェクト。

③ Sプロジェクト(2011年度～)

近江楽座でのこれまでの実績をもとにステップアップを目指し、活動資金の助成を必要としない自立したプロジェクト。(上位 senior、特別 special の S)

④ Eプロジェクト(2018年度～)

国連が提唱している「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成につながるSDGs推進に特化したプロジェクト。とくに自分たちの取組を学校や地域等に普及することに力をいれている活動。(教育 education、拡張 extend の E)

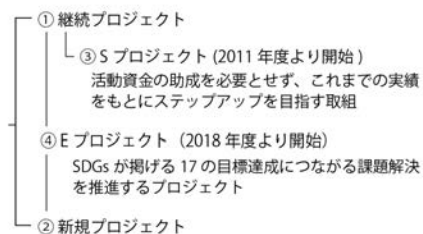
Ⅱ Bプロジェクト(地域協働型プロジェクト)

自治体や企業、団体等から依頼のあった課題について、「近江楽座」として取り組むテーマを設定し、学生主体のプロジェクトを募集します。学生チー

ムにはテーマに対する企画提案を求め、採択されたチームは、指導教員と地域共生センターが支援し、依頼先と共同で取り組みます。

Aプロジェクト(学生主体型プロジェクト)

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動プロジェクト。



Bプロジェクト(地域協働型プロジェクト)

学生が主体となって取り組むのがふさわしい自治体や企業等から提示された課題に、学生チームと依頼先とが協働で取り組むプロジェクト(2007年度より開始)

1-3 プロジェクトの採択について

プロジェクト募集期間

A プロジェクト
日 時：2019年4月12日(金)～5月10日(金)

募集説明会

A プロジェクト
日 時：2019年4月12日(金) 12:30-13:00
場 所：講義室 A4-107

応募件数

A プロジェクト 23 チーム
・継続プロジェクト 21 件
（うちSプロジェクト1件、Eプロジェクト12件）
・新規プロジェクト 2 件
（うちEプロジェクト1件）

プロジェクト審査

A プロジェクト「公開プレゼンテーション・審査会」
日 時：2019年5月25日(土) 9:30-15:00
場 所：中講義室 A7-101
内 容：プレゼンテーション（プレゼンテーションシートによるプロジェクト説明）および質疑応答、審査（非公開）

選定委員（順不同 敬称略）：

- 滋賀県立大学 地域連携担当理事
地域共生センター長 高橋滝治郎
- 滋賀県立大学人間看護学部 准教授 米田照美
- 滋賀県立大学環境科学部 講師 平岡俊一
- 信楽窯元散策路のWA アドバイザー 盛千嘉
- 滋賀県私学・県立大学振興課 主幹兼係長
大西宗英

採択および採択通知

A プロジェクト
日 時：2019年5月30日(木)
通知方法：近江楽座ホームページおよび学生ホール掲示板にて通知

採択件数

A プロジェクト 22 チーム
・継続プロジェクト 21 件
（うちSプロジェクト1件、Eプロジェクト12件）
・新規プロジェクト 1 件
（うちEプロジェクト1件）

活動説明会

A プロジェクト
日時：2019年5月31日(金) 12:30-13:00
場所：講義室 A4-107
内容：採択プロジェクト代表者に対する事業計画、会計処理等の進め方に関する説明会



公開プレゼンテーションの様子

<公開プレゼンテーション スケジュール>

時間	発表順	区分	採択年数	プロジェクト名
9:30~9:35	はじめの挨拶			
9:35~9:42	1	新規・継続	10年(2009~)	とよさただプロジェクト
9:42~9:49	2	新規・継続S	10年(2009~)	あかりんちゅ
9:49~9:56	3	新規・継続	7年(2012~)	地域博物館プロジェクト
9:56~10:03	4	新規・継続	15年(2004~)	Taga-Town-Project
10:03~10:10	5	新規・継続E	14年(2005~)	廃棄物バスターズ
10:10~10:17	6	新規・継続E	3年(2016~)	座・沖島
10:17~10:24	7	新規・継続E	1年(2018~)	JH1730 CONSERVATION PROJECT
10:24~10:31	8	新規・継続E	7年(2012~)	かみおかべ古民家活用計画-SLEEPING BEAUTY-
10:31~10:38	休憩			
10:38~10:45	9	新規・継続E	15年(2004~)	未来看護塾
10:45~10:52	10	新規・継続	8年(2011~)	内湖の再生と地域の水辺コーディネート
10:52~10:59	11	新規・継続	9年(2010~)	おとくらプロジェクト
10:59~11:06	12	新規・継続	13年(2004~)	障がい児・者、自立支援・共生プロジェクト
11:06~11:13	13	新規・継続E	6年(2013~)	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
11:13~11:20	14	新規・継続E	6年(2013~)	政所茶レン茶`ー
11:20~11:27	15	新規・継続E	15年(2004~)	とよさと快蔵プロジェクト
11:27~11:34	16	新規・継続	8年(2011~)	木興プロジェクト
11:34~11:41	休憩			
11:41~11:48	17	新規・継続E	4年(2015~)	タクロバン復興支援プロジェクト
11:48~11:55	18	新規E・継続	ー	ハティヤール村カディプロジェクト
11:55~12:02	19	新規・継続E	3年(2016~)	BAMBOO HOUSE PROJECT
12:02~12:09	20	新規・継続E	13年(2005~)	フラワーエネルギー「なの・わり」
12:09~12:16	21	新規・継続E	1年(2018~)	子ども学習支援サポーターズ
12:16~12:23	22	新規・継続	7年(2012~)	たけともミライ
12:23~12:30	23	新規・継続	ー	モノづくりから始まる沖島活性プロジェクト
12:30~12:40	終わりの挨拶			

2 各プロジェクトからの活動報告

2-1 活動実績報告

●	01	あかりんちゅ	12
	02	地域博物館プロジェクト	14
●	03	とよさと快蔵プロジェクト	16
●	04	子ども学習支援サポーターズ	18
●	05	廃棄物バスターズ	20
●	06	かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-	22
●	07	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	24
●	08	タクロバン復興支援プロジェクト	26
	09	障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト	28
●	10	BAMBOO HOUSE PROJECT	30
	11	Taga-Town-Project	32
	12	おとくらプロジェクト	34
●	13	政所茶レン茶 [®]	36
	14	木興プロジェクト	38
●	15	未来看護塾	40
	16	たけともミライ	42
●	17	フラワーエネルギー「なの・わり」	44
	18	とよさらだプロジェクト	46
●	19	座・沖島	48
	20	内湖の再生と水辺コーディネート	50
●	21	JH1730 CONSERVATION PROJECT	52
●	22	ハティヤール村カディプロジェクト	54

● : Sプロジェクト

● : Eプロジェクト

次ページ以降のチームデータについて
補足説明

※近江楽座活動年度について

○ : 不参加

● : 参加

を示しています

※メンバー数は、活動に関わった学生の
総数です。



エコでスローな夜を

お寺などから使えなくなったろうそく、「残ろう」をいただき、それを再利用してリサイクルキャンドルを作り、キャンドルナイト、キャンドル作り教室、キャンドル販売などを行っています。自分たちで運営資金をまかない、独自予算で活動している唯一のSプロジェクト。

TEAM DATA

チーム名：あかりんちゅ
 代表者：関しおり（人間文化学部）
 メンバー数：12名
 指導教員：平山奈央子（環境科学部）
 活動場所：学内、彦根市、県外
 関係団体：滋賀教区浄土宗青年会
 近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

- (1) 教禅寺キャンドル作り教室
- (2) イナズマロックフェス



キャンドル作り体験 (09/21)

- (3) とよさとハロウィン
- (4) 湖風祭
★見出し写真：湖風祭でのキャンドルナイト (11/18)
- (5) OKB ストリート キャンドルナイト
- (6) ティーライトキャンドルの製造委託
- (7) 商品開発
- (8) 湖風夏祭
- (9) うきうきホーム
- (10) 残ろう回収

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年は、新しい場所でのイベントのお声がけや参加が多いと感じる1年だった。特に、他大学から活動体制や残ろうの集め方に関する問い合わせがあり、他大学にもあかりんちゅの活動を知ってもらえていることを実感できた。

また、以前あかりんちゅと関わりのあった方の紹介で教禅寺というお寺で新たにイベントを行うことができた。初めてだったので参加人数は少なかったが、来年もイベントの約束をしていただき、新たなつながりができた。あかりんちゅが行うイベントの多くが固定化されているので、このように活動の幅が広がったことは大きな成果だと思った。

課題としては、残ろうの量や保管方法の改善が挙げられる。毎年残ろうをいただいているのだが、それを使いきれず年々残ろうが増加している。そのため保管場所を占領している状態が続いており、残ろうの受け取り体制を変更するべきである。またあかりんちゅが使用したろうそくについては、保管せずに捨てるようにするなど、ろうそくを溜め込まないようにする必要がある。

来年度からは新2年生が中心となって活動するため、例年よりも負担が大きくなることや今まではメンバーの学科が偏っていたため予定を合わせやすかったが、学科が増えたためそれも難しくなる。今まで以上に連絡や報告を行う事が必要となる。また今年度でできた繋がりを継続することも課題である。

活動を通して学んだこと (抜粋)

自分たちの活動が地域貢献になっていると実感できる場面が何度もあった。特にキャンドルナイトを行った際には、キャンドルを見て笑顔になってもらえたり声をかけてくださったりと、大変な作業もやって良かったと思うことができた。これからも活動に関わったすべての方々に喜んでいただけるような活動を目指して頑張りたい。

今井穂乃香 (生活栄養学科 1 回生)

副代表を務めて大変だったことがティーライト製造依頼である。初めて行ったことばかりで不安に思うこともあったが、メンバーからアドバイスをもらったり、用意を手伝ってくれたため大きな問題もなく終わった。活動を通じて依頼をする難しさを学び、同時にチームを代表して責任を持って活動することができてよかった。

恒川瑞季 (地域文化学科 3 回生)

活動を通して、地域の方々と交流を深めるという貴重な経験を得ることができた。特にキャンドル作り教室は、たくさんの子どもたち楽しんでもらえて、とてもやりがいを感じた。今後は、改善すべき所を見直しつつ、より充実した活動ができるよう努力したい。

柳川玲奈 (地域文化学科 1 回生)

地域からのコメント (抜粋)

浄土真宗本願寺派 青柳山 教禅寺 住職 青柳圓慎さん

初めてあかりんちゅさんの活動を知り、私ども教禅寺の「お盆のつどい」で、手づくりキャンドル教室を開催いただきました。

「お盆のつどい」には、幅広い年齢層の方にご参加いただけます。毎年、本堂や境内にキャンドルを灯し、どの年代の方にも楽しんでいただけるような催しをと考え、色々と趣向を凝らしてまいりました。この度、あかりんちゅさんの御協力を得て、より一層充実した「つどい」になってきたと非常にありがたく、感謝しております。

また、お寺では結構な量の残ろうが出来ます。この残ろうをどうやって有効活用ができるかと考えた中で、「灯り」を用いた活動をされている、あかりんちゅさんとのご縁をいただき、御協力をいただけたことで、これらの残ろうを新たな形で生まれかわらせていただきました。

私どもの「つどい」の中で新しくなった、また、ご自身で作ったキャンドルに火を灯して、多くの方たちの心にあたたかな気持ちと、お念仏のともし火をとどけていただくことができたことが、住職としてなによりの喜びです。

指導教員より (抜粋)

環境科学部 平山奈央子

昨年度までの課題を踏まえ、一人でも多くの来場者にキャンドルナイトを楽しんでもらえるよう実施時間を変更するなど、一つひとつの取組に改善や工夫が見られます。また、教禅寺さんや旧豊郷小学校など新たな繋がりを通じて活動の広がりを増やすことに対応できたと思います。

さらに、実施体制では入学式や活動イベントの中で積極的に勧誘し、メンバーを充実させることができました。異なる学科の学生と一緒に活動することで活動者自身が新たな視点を得ることができると思います。

「何を実施するか(活動内容)とどのように実施するか(運営体制)」は両輪の関係です。今後の活動計画を立てる際、実施内容と運営体制、両方の見直しやさらなる発展があるとメンバーのやりがいが増すと思います。既存の活動を変化させる時にはエネルギーが必要です。ぜひ個々の活動メンバーが実施してみたい事を大切にして、活動計画を立てることをお勧めします。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



滋賀県立大学生協ショップ SDGs コーナーの商品
(キャンドルセット)



お寿司型キャンドル



オリジナルキャンドル

02 地域博物館プロジェクト



文化財を救え！我ら学生学芸員！

民具や古文書、お祭りなど、地域には多くの文化財があります。“地域文化財”や地域の歴史・文化などを住民の方々とともに調べ、活用し“地域博物館”をつくりあげていくことで、地域の魅力を再発見することをお手伝いします。

TEAM DATA

チーム名：スチューデント・キュレーターズ

代表者：中島みなと（人間文化学部）

メンバー数：30名

指導教員：市川秀之、東幸代（人間文化学部）

活動場所：学内、彦根市、米原市、高島市、近江八幡市

関係団体：白谷荘歴史民俗博物館

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

- (1) 近江八幡西川嘉右衛門家調査・展示事業
★見出し写真：西川嘉右衛門家調査作業（06/30）
- (2) 白谷荘歴史民俗博物館調査・展示事業
- (3) 奥伊吹調査・展示事業



民具調査（10/19）

- (4) 学内展示事業
- (5) 博物館夏祭り



絵葉書作りワークショップ（07/15）

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は、本プロジェクトにとって様々な節目を迎える年となった。

西川嘉右衛門家の調査事業では、調査のしやすい環境を整え、新たな事業が始めやすい体制を整えることができた。今後も丁寧・正確な調査を意識し、残りの古文書の整理を行っていききたい。いずれ展示計画を立てていくことになるので、1回1回の活動を大切に、展示計画をイメージしながら調査を進めていきたい。

白谷荘歴史民俗博物館での事業は、長年の調査が完了し、整理の段階に入った。ラベリング作業は今まで経験したことのない活動で、メンバー一人ひとりにとって、貴重な経験になったように思う。

奥伊吹での調査事業も今年ほとんどの調査が完了し、調査した民具を使って学内で展示をすることができた。自分たちが直接調査したものを使って展示を行い、たくさんの来場者に見ていただけたことは、メンバーにとって大きな経験となった。今年度は3回生が少なかつたため、2回生が様々な事業でリーダーシップをとって活動した。展示班とワークショップ班、模型製作班に分かれ、それぞれ分担して活動をすることができた。

博物館夏祭りで行ったワークショップでは、昨年度よりも多くの来場者に体験してもらい、多くの人に喜んでもらうことができた。自分たちが作ったものを、実際に目の前でたくさんの来場者に喜んでもらうことができ、大きな自信になった。

本プロジェクトは今まで少人数で活動していたため、大人数で活動する仕組みができていなかったが、今年度は大人数で活動するための組織の基礎づくりができた。少人数プロジェクトから、大人数プロジェクトへと転換したことも、節目の1つといえる。ただ、活動の参加のばらつきがあったり、連携がうまくとれなかったり、作業負担が一部に集中してしまったり、改善点は多いので、来年度以降も、組織づくりを意識した活動をしていきたい。

活動を通して学んだこと (抜粋)

西川家の調査では、昔のはがきやメモ、日記などに保管番号をつけ、一つひとつ調査票を書くという作業を行いました。昔のはがきなどに書かれている文字は今の字とは違い、読むのにすごく苦労しました。昔の人が書いたものを見て触る経験ができることに感謝しながらこれからも活動を続けていきたいと思いました。

大田芽依 (地域文化学科 2 回生)

印象に残っているのは、米原奥伊吹の古民家の模型作りです。経験がなく苦労しましたが、メンバーで協力して作り上げて展示することができました。月2回の活動でも、地域の方と交流したり、昔のことを教えていただいたり、普段の学校生活では経験できないことをさせてもらい、自分の世界を広げることができました。

長野緋音 (生物資源管理学科 2 回生)

西川家での調査は文書の整理から始まったので、初めての経験でした。タンスの中から文書以外にもいろいろ出てきて面白かったです。筆で書かれた手紙が多く、読み取るのが難しかったり、全く内容が分からなかったり、で、苦戦しました。もう少し読めるように次回からの活動も頑張りたいと思います

山本千尋 (地域文化学科 2 回生)

近江八幡の地場産業でもあるヨシについて西川さんにお話を伺い、また古文書にも触れました。きちんと保存してあるわけではなく劣化しているものが多くあったので自分たちの活動の必要性を実感しました。米原の調査では古民家の模型を製作しました。2回生を中心に、当時の暮らしが分かる良いものができました。

川島栄里子 (材料科学科 3 回生)

地域からのコメント (抜粋)

白谷荘歴史民俗博物館 館長 川島光男さん

当館の内部資料(古民具・古文書類・教科書類)の調査・整理・維持・保存に継続して携わっていただいていることに感謝します。当館に立ち寄る多くの方からも感心を寄せてもらっています。資料整理にはもう少し時間がかかりますが、学生の皆様・先生はもちろん一般のボランティアの方にも協力していただき随分と進んでまいりました。今後は、当館の資料を更に活用していきます。現代生活のなかで忘れ去られていく地域の貴重な日常生活の歴史・文化を伝承していきます。学生の皆様には身をもって地方の地域の歴史を少しでも感じてもらい、自身の将来のお役に立てていただければと思っています。必ず活動は役に立つと思います。

指導教員より (抜粋) 人間文化学部 市川秀之

2019年度の主要な事業としては、西川嘉右衛門家資料の調査、および白谷荘資料の調査があげられるが、双方ともほぼ一月に一度ずつ継続的に調査を行い、相当な進展をみている。白谷荘資料のうち教科書についてはほぼ調査が終了しつつあり、7000点近くにおよぶ明治以後の教科書の内容からみて国の登録文化財への推薦も考えられうる段階にきている。また西の湖畔で代々ヨシ問屋を営んできた西川家の資料についても、古文書を中心に調査を進めている。さらに奥伊吹の民具調査を夏に実施し、湖風祭においては、古民家の模型や、民具の展示を行い、広くその成果を知っていただけたのも評価できる。くわえて県下の15の博物館が集結してそれぞれが体験学習を行う博物館夏祭りの事務局をつとめたことは、学生と地域や行政を結ぶことができ、非常に大きな意味を持った。南彦根のビバホールで行われた博物館夏祭りには1400名を超える来館者があった。これらの活動を通じて「地域博物館プロジェクト」は広く認知され、大きな地域貢献をなし、またそれに参加した学生にとっても有益な学びの場となっている。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



奥伊吹古民家模型



プロジェクト紹介パネル

<その他成果物>

湖風祭チラシ

プロジェクト紹介リーフレット

03 とよさと快蔵プロジェクト



古民家改修でまちを元気に

豊郷町に多く残る空き蔵や空き家を地域資源として捉え、学生なりの視点で改修・再利用し、地域を盛り上げる活動を行っています。地域のイベントへの参加やイベント企画、蔵を改修した BAR 運営なども行い、まちを盛り上げるまちの人をサポートしています。

TEAM DATA

チーム名：とよさと快蔵プロジェクト

代表者：萩原咲楽(人間文化学部)、福元美希(環境科学部)

メンバー数：113名

指導教員：迫田正美(環境科学部)

活動場所：犬上郡豊郷町

関係団体：NPO 法人とよさとまちづくり委員会

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

- (1) 久保川邸改修コンペ
- (2) 久保川邸改修合宿
★見出し写真：改修作業 (08/26-8/29)
- (3) 春のミツマルシェ



子ども向けワークショップ (04/28)

- (4) ピアガーデン
- (5) 移動仮設カフェ「出張タルタルーガ」制作
- (6) どんごまつり
- (7) 豊郷観光協会との共同イベント
- (8) 湖風祭出店
- (9) Bar タルタルーガの通常営業
- (10) 子ども食堂

1年の活動まとめ・考察(成果と課題)

この一年間、代表として、会計として活動して、たくさんの知識と経験を得ることができた。活動をするうえで一番大切だと感じたのは町の人やプロジェクトメンバーとのコミュニケーションだ。どの事業においても情報共有は欠かせないもので、話すことが相手への信頼につながるものだと感じた。だからこそ町の中で活動していくうえで、町の人々に対して私たちはこういう活動をしているのだということを伝えることはとても大事なことだと思った。豊郷町に3年間通い続けたことで、この町の建物や空気や人々がすべて愛おしく感じ、まちづくりに関わられたことを誇りに思った。

とよさと快蔵プロジェクトの活動を進める上で、壁にぶつかることが多々あった。特に大きかったのが参加人数の増加だ。今年度ついに100人を超え、プロジェクト発足当初からは想像できないほどに人数が増えている。単純に考えると人数が増えればその分より多くの作業ができ、イベント時にも人数に困ることはないと思える。しかし100人のメンバーそれぞれのモチベーションは異なり、参加する頻度や意欲もさまざまである。そのために部門を分けて活動するシステムを取り入れているが、プロジェクト全体をうまく回すというのはとても難しいことなのだ強く実感した。大所帯であることを大きなメリットとしてうまく活動を統率できる方法を模索していくことが今後も課題となるだろう。

活動を通して学んだこと

2年目のとよさと快蔵プロジェクトは1年目とは比べものにならないほどに濃密な一年でした。この変化は快蔵という団体の変化によるものでもありますが、一番には自分自身の変化、副代表という立場になったことが影響していると思います。来年度、代表として過ごす一年が今から待ち遠しく思います。

岡田龍介（環境建築デザイン学科2回生）

今年度のとよさと快蔵プロジェクトは、“まちづくり”が私達の活動の根本であるということを再認識するというテーマを掲げ、活動してきました。その結果、団体の人数は増えましたが、メンバーの意識の差が出ることを防ぐことができたのではないかと思います。

栢田智花（生活デザイン学科2回生）

一年間「まちづくり」を意識して活動してきた結果、「豊郷町が好き」と言ってくれる町民や学生が増えたこと、そして「まちづくりに力を入れたい」と思ってくれる後輩ができたことはとても嬉しかったし、これが最大のまちづくりなのではないかと私は思った。

萩原咲楽（生活デザイン学科3回生）

地域からのコメント

NPO 法人とよさとまちづくり委員会 理事長 北川稔彦さん

今年、とよさと快蔵プロジェクトは、大町地区にある一戸建の物件を3人家族に貸し出すという設定で改修してくれました。グループごとに改修案を考えて、事前にプレゼンテーションを行い、“「小人と暮らす家」～広がる世界～”に決まり、女性グループらしい夢のある温かな改修を行ってくれました。また、子どもたちとのどろんこまつりも賑やかに開催してもらいました。先輩たちもそうであったように、活動を通してより豊郷に親しみを持ってくれることを嬉しく思います。

指導教員より

環境科学部 迫田正美

とよさと快蔵プロジェクトは地域に根ざした活動として着実に成果を積み上げてきている。また、学生としての組織の運営についても、OB・OGの協力を得ながら安定した活動を継続できていることはたいへん評価できると思う。今後も主体的な活動を継続的に続けていってほしい。

そのような中で今年度末にコロナウィルスの発生に関連して様々な学生活動にも影響が出たことは今後の教訓にしなければならないと考える。今般のできごとは大学全体で対処すべき事態であるが、個別の活動においても不測の事態に適切に対処するためには、日頃から様々な事態を想定し、事前に活動の安全性や危険への備えを怠らない注意深さが要求される。

来年度からはコアメンバーの体制を変更することになるが、活動の規模が大きくなればそれだけ多くの学生が多方面で動くことになるのであるから、一人ひとりのメンバーの自覚が一層必要になることを再確認してほしい。その上で、数多くのメンバーを擁し、またメンバー構成が多様になる中で、改めてこれまでの成果を生かしつつ、ますます活動の幅を広げていってくれることを期待している。

今後も地域創生事業などにも関連しながら地域の活性化に寄与するプログラムを踏まえた改修作業となるものと思われるので、まちづくり委員会の方々との連携を深めるとともに、行政の方々とも十分に意見交換しながら活動を展開してくれることを期待する。

DELIVERABLE

成果物／制作物



どろんこまつりポスター



ビアガーデンポスター

<その他成果物>

春のミツマルシェポスター

カイツウノススメ

久保川邸リノベーション

移動仮設カフェ「出張タルタルーガ」

04 子ども学習支援サポーターズ



子どもの学習支援と居場所づくり

彦根市の中地区公民館で行われる「学び育ちLL教室」をはじめとする、NPO 法人 Links のサポート事業に学生サポーターとして参加し、子どもたちの学習支援と居場所づくりの活動に取り組んでいます。子どもたちに寄り添い、一緒に考え、話し、元気に遊びます。

TEAM DATA

チーム名：子ども学習支援サポーターズ

代表者：石神愛海（人間文化学部）

メンバー数：14名

指導教員：原未来、松嶋秀明（人間文化学部）

活動場所：彦根市、愛荘町

関係団体：NPO 法人 Links

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

- (1) 子ども学習支援活動
- (2) 各種イベントの参加・実施



中地区文化祭出店（10/20）



ハロウィンパーティー（10/28）

★見出し写真：クリスマス会（12/16）

- (3) 広報活動
- (4) 他の楽座団体との協働

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

一年間、LL 教室での子ども学習支援活動を中心に、子どもサポート活動を実施した。

子ども学習支援では、子ども一人ひとりに合ったコミュニケーションをとり、それぞれの習熟状況に合わせた学習指導を行った。単に教えることよりも、子どもを受容すること、自ら学習に向かえる心や学習基盤をつくることを心がけて活動した。

今年度は、昨年度の課題であったメンバー不足を解決するために、SNSや広報チラシを活用して、積極的に新メンバーを募集した。その結果、9人の新メンバーが仲間に加わった。メンバーが増えたので、イベントを実施する際、より多様な意見をとりいれ良い計画を立てることができ、役割を分担することができた。イベント後には、ふりかえりを行い、良い点や反省点を出し合い、その場とライングループ、ランチミーティングにて共有している。

昨年度にひきつづき、Links 主催イベントへの参加や、ハロウィンパーティーやクリスマス会など学サポ主催のイベントを多く実施した。楽しい経験を共有することで、子ども・地域の大人・学生のつながりが深まった。今年度、子どもが将来を考えたり、入試制度や志望高校について詳しく調べたり理解できるようなイベントの実施を考えた。しかし、もっと時間をかけてじっくりと計画を練ろうということで、実施を見送った。今後、レクリエーション系のイベントに加えて、子どもの力になるようなイベントも子どもの現状に即して考えていきたい。

今年度の事業をふりかえり、改善点を踏まえて、来年度も継続していきたい。継続にあたって、参加するメンバーの固定化という課題がある。イベント以外の活動にも多様なメンバーが継続的に参加できるように工夫していきたい。

活動を通して学んだこと

子どもたちはそれぞれ思っていることがあったり、憧れを持っていたり、一人ひとり個性があって素敵だなと思いました。一生懸命勉強している姿を見ていると私も頑張ろうと励まされました。私自身がサポーターの皆さんに助けてもらったことも多かったのですが、子どもたちと共有できた時間はとても有意義な時間でした。

光本ほのか（生活栄養学科1回生）

子どもたちと会話する中で、大学生という立場だからこそ話せる内容があるように感じた。無理に大人のように子どもたちと接しようとするのではなく、私たちの年代だからこそできる話や関わり方をしていくことが大切だと感じた。学生という立場を強みにした支援をしていきたい。

高橋由樹（人間関係学科1回生）

サポーターズとして子どもと関わる中で、「話すこと」の大切さと楽しさを改めて感じることができました。会話は、相手がいるからできること。そう思うと、何気ない会話も嬉しかったです。友達ほど近くなく、しかし先生程遠くないこの関係だからこそ話せることもあるのだと知りました。

高室侑里（人間関係学科1回生）

子どもたちと上手くコミュニケーションをとるには、子どもの個性を知ることや、自分のできることを知ることが大切だとわかった。子どもがどんなことをしたいのかを考え、自分のできることをしていきたい。次の年も、子どもたちと一緒に楽しい場所を作れるよう活動を頑張っていく。

小石原瑛斗（環境政策・計画学科2回生）

地域からのコメント（抜粋）

NPO 法人 Links 代表 柴田雅美さん

NPO 法人 Links は多くの子どもの居場所活動を行ってきましたが、みなさんの存在がなくては活動が成立しませんでした。オリジナルな企画や子どもサポートへの提案によって、居場所活動が安定的かつ革新的に活動ができたと思います。

私は滋賀大学で学生の地域活動をサポートする教員をしています。大学生が地域へ出ると自分のやりたいことやオリジナル性を優先するばかりに、フィールドを提供する地域のニーズに合っていないということが時々見受けられます。学生のオリジナルな活動は時に革新的で魅力的です。しかし、それを発揮できるフィールドがあって初めて生かされるもの、フィールドがなければ自己満足に終わります。サポーターズの皆さんは、まず地域のニーズは何なのか、子どもたちのニーズは何なのかを基本において、自分たちの強みや特色を出してくれています。地域が大学生と協働することの意味をよく理解してくれていて、安心して連携できる学生たちです。

指導教員より（抜粋） 人間文化学部 松嶋秀明

大学生が対人援助にかかわる場合、しばしば周囲の大人?から「大学生のよさをいかして」などといわれるんじゃないですか?私自身、学生時代、大学生である自分にとって、大学生のよさっていわれても、自分にそんな魅力があるとは思えないし、子どもの役にたつようなことは到底できないと感じて、どうやったらいいのかわかなくてほしいと思ったものです。

とりあえず現在は、自分の役割をはっきりさせようということ自体が、失敗のもとではないかなと思うようになりました。自分の関わりはこれだと思った瞬間に、子どもたちはそういう大人の存在を暑苦しく思って去っていくんじゃないか。あれでよかったのかなと常にドギマギしているのがいいんじゃないかと思っています。

でも、いつもドギマギしてるのって疲れますよね。仲間たちがいるというのは強いんじゃないでしょうか。仲間がいて一緒に議論できたら、元気がでて頑張れそうな気がします。今後も、自分たちの取組をふりかえり、悩みや思いを話しあいながら、活動を継続・展開していける仲間であってください。

DELIVERABLE

成果物／制作物



クリスマス会チラシ



ニューイヤースポーツ交流会チラシ

<その他成果物>

ハロウィンパーティーチラシ
メンバー募集チラシ

05 廃棄物バスターズ



目指せリサイクル社会

プラスチックの成形技術を用いて、廃プラスチックのリサイクルをテーマに活動しています。リサイクルプランターに続き、新たなリサイクル製品として雨水タンクの開発を行っています。hana-wa 活動や清掃活動にも参加し、地域との繋がりを大事にしています。

TEAM DATA

チーム名：廃棄物バスターズ
代表者：金澤暉（工学研究科）
メンバー数：18名
指導教員：徳満勝久（工学部）
活動場所：彦根市、滋賀県内、県外
関係団体：社会福祉法人いしづみ会 他

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

- (1) 雨水タンク作製
- (2) hana-wa 活動



リサイクルプランターメンテナンス (10/23)

- (3) 彦根市清掃活動
- (4) ご当地キャラ博実行委員会



ゴミ分別の啓発活動 (10/19・10/20)

- (5) 滋賀グリーン活動ネットワーク (SGN)
- (6) 犬上川河口周辺の清掃活動
★見出し写真：積水化学工業株式会社多賀工場の方とゴミ拾い (11/17)
- (7) 琵琶湖サポーターズ・ネットワーク
第1回交流フォーラム

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

雨水タンク作製について、試作品をつくることができました。容量約10Lと、目標としているサイズには程遠いものだが、大きな一歩を踏み出せたと考える。さらなる原料の選定や成形条件の追求、ビジネスとして雨水タンクを生産するプロセスなど、多くの問題を抱えているが、広報活動や協力企業との打合せを重ねていくことで実現できるのではないかと考えている。

hana-wa 活動では、NPO ぼぼハウスと連携して継続したペットボトルキャップの回収を行うことができた。また、活動の認知度上昇により、数々のフォーラムにて登壇し、活動について発表させていただくことができた。

ご当地キャラ博では、計画どおりに物事を進めることができ、催事に参加された方々にゴミ分別の啓蒙や、ゴミラレンジャーとして地域の子どもたちと交流することができた。また、ゴミを捨てて来た人に名刺を配ることで、地域の人たちとのゴミ分別に対する意識改革と廃棄物バスターズの広報活動に大きく役立ったと考える。

今年度、一般社団法人滋賀グリーン活動ネットワーク (SGN) の幹事に就任し、多くの企業や団体と方々と協力し、環境に配慮した暮らしや事業者の環境行動の水準を高めるためのセミナーの運営等を行った。大変貴重な経験を積むことができたと同時に、幹事として責任感をもって今後も活動していきたい。

また、初めて企業と合同で犬上川河口周辺の清掃活動を実施することができた。幾度も打合せを行い、清掃活動内容や教育内容を精査した経験は大変有意義なものだった。今回限りのものにならないよう、先方との連携を密に取り、来年度に引き継いでいきたい。

活動を通して学んだこと (抜粋)

人とのかつなりの大切さを改めて実感しました。様々な活動を行ってきましたが、そのどれもが当団体のみでは成しえない活動であると感じたためです。当団体に寄せられる期待は大変大きなものであり、ただのボランティア団体ではないことを痛感しました。責任感をもって今後も取り組む必要があると強く感じました。

金澤暉 (工学研究科材料科学専攻1回生)

積水化学工業㈱多賀工場・積水多賀化工㈱から声がかかり、清掃活動を共同で実施することができた。事前調査や行政への連絡、小学生から大人まで楽しんでいただくための企画など準備は大変であったが、参加者から嬉しい言葉をいただき達成感を覚えた。活動にはたくさんの方々のお力添えが必要不可欠だと実感した。

前田麻美 (工学研究科材料科学専攻1回生)

雨水タンクを作製することができたのが一番の成功であると考えています。反省点は委託する企業へのサンプル準備が遅れたため、改善点を来年に回してしまったことです。計画性の大切さを痛感しました。また、企業とゴミ拾いを実施しました。このような活動をもっと行い、ゴミを捨てない意識付けを行いたいです。

北山晃平 (工学研究科材料科学専攻1回生)

琵琶湖湖岸清掃において、企画を実現するためには計画を細部まで何回も確認することの重要性、企画に参加される方の立場に立って考え、配慮することの難しさを学びました。また雨水タンクの試作をしたことで、課題を真正面から突き付けられ世の中に製品として送り出すことがいかに困難なことを思い知らされました。

西村暢哉 (工学研究科材料科学専攻1回生)

地域からのコメント (抜粋)

積水化学工業株式会社多賀工場 山田雅和さん、西澤祥季さん

両者に関係の深いプラスチック・琵琶湖をキーワードで繋がり、11月17日に弊社従業員&家族と一緒に県立大学に近い琵琶湖湖岸・犬上川河口の清掃活動を実施することができました。

双方とも湖岸清掃活動の経験がなく、実施するにはいくつもの課題をクリアしなければなりません。これらの問題に対し真摯に向き合い自ら考え、積極的にアイデアを出し、行動いただきました。特に清掃活動日に実施したマイクロプラスチックの環境汚染についてのレクチャーと廃棄物の分別のフィールドワークは、大学での学習・研究成果をいかに発揮していただきました。

環境問題は単純ではありません。また活動をしてすぐに効果が出るものでもありません。大切なのは継続すること、あきらめず、場合によっては状況を見て修正することが必要と考えています。今後も誇りと勇気をもって活動を推進していくことを応援させていただきます。

指導教員より (抜粋)

工学部 徳満勝久

hana-wa 活動や地元ボランティア団体と共同で彦根市内の美化活動、イベントのサポート、「荒神山春祭り」でのゴミステーションやゴミ拾い活動、障がい児童施設「ぼぼハウス」でのペットボトル回収など、“地域での地道な活動”を継続して実施すると同時に、新たな取組として積水化学工業株式会社多賀工場さんとの「びわ湖合同清掃活動」を実施し、犬上川からびわ湖湖岸沿いまでの清掃を行った。今年度は、「企業とのコラボレーション事業」を開始した“新生・廃棄物バスターズ”の年であったように思う。更には、「地域分散型治水ダム」と銘打った“リサイクル雨水タンク製造技術”に関しても、その目途が漸く立ったという印象である。

今年からは滋賀グリーン活動ネットワーク(SGN)の学生代表幹事を引き受けることになり、対外的にも認められる学生活動団体となった。これは、それだけ大きな責任を担うことにもなり、これからの廃棄物バスターズとしての発言・行動が益々重要となることから、来年度以降、その自覚と自負を持って活動の幅を広げながら、深耕してくれるものと期待している。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



雨水タンク試作

06 かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-



地域よし、学生よし、古民家よし

彦根市上岡部町にある古民家で、「地域よし×学生よし×家主よし」の三方よしの古民家活用プロジェクトを展開しています。古民家を地域交流の場、学生の学びの場として活用するため、改修作業、畑作り、交流イベントなど様々な活動を行っています。

TEAM DATA

チーム名：かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-

代表者：鍵本里奈（人間文化学部）

メンバー数：9名

指導教員：林宰司（環境科学部）

活動場所：彦根市上岡部町

関係団体：上岡部町自治会、滋賀県愛瓢会 他

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

(1) 古民家改修事業

(2) イベント開催事業



梅ジュース作り (06/30)

(3) ひょうたん事業



畑の様子 (07/15)

(4) 地域行事への参加

★見出し写真：地藏盆 (08/17)

(5) ひょうたん出展

(6) カロム大会

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

活動の成果としては三つ挙げられる。一つ目は古民家の建具改修により、雨戸がすべて開けられるようになったことだ。改修により明るい離れとなり、イベントを行ないやすくなった。二つ目はイベント開催を通して地域の方との交流が深まったことだ。三つ目はひょうたんの出展により本団体の存在を広めることができたことだ。朝市や火のある暮らし祭りなど、昨年度とは異なる地域でひょうたんの販売を行うことができた。三方よしエコフェアでは加工体験ワークショップを行った。一般の方にもひょうたんに触れ合う機会をもってもらうことができた。そして、新聞に掲載してもらうなどメディアを通じて本団体の活動を知ってもらうこともできた。

課題としては二つ挙げられる。一つ目は、地域行事に積極的に参加できなかったことである。今年度は2回しか参加しておらず、古民家の外で地域と関わることができなかった。今後は地域行事にも可能な限り参加させていただき、イベントの開催だけでなく清掃活動や、地域の伝統行事などでも地域に貢献していきたい。二つ目は、古民家のメンテナンスを継続的に行うことができなかったことだ。今後は新しく古民家に学生が住む予定であるが、イベント開催時などの清掃を徹底し、よりよい環境を維持していきたい。

運営面では班体制を廃止し、年間を通したひょうたん、改修の担当者を決め、イベントごとの担当者を決めて活動を行なっている。できる限り、メンバー全員が協力しあって進めていけるようにしたい。

また、もっと上岡部町全体へと視野を広げた活動を行ってきたい。今年度は2つの団体とのコラボ計画を行なったがその他の近江楽座団体とも連携をとったり、コラボ企画を考案し、横のつながりを作ることも考えていきたい。上岡部町の歴史や現状を知り、私たち学生ができることは何か、そしてメンバーが自分の学んでいることを活動にどのように生かしていけるのかについて改めてメンバー間で話し合っていきたい。

活動を通して学んだこと (抜粋)

ひょうたん栽培、加工、販売を自分たちの手で行うことで特産のひょうたんの魅力を身近に感じることができた。中でも印象的だったのは護国神社で販売した際にある音楽関係の方がひょうたん楽器のことをお話してくださったことである。新しい視点を頂き、またコミュニケーションが生まれた瞬間だと思った。

久木絢香 (国際コミュニケーション学科 1 回生)

この活動をしようと思ったきっかけは自分の地元で行われている活動だったからである。学生が空き家を活用してイベントを行ったり、地域の活動を少しでも手助けすることで地域に貢献することができた。過疎化が進み空き家が増えている現状があり、1つの地域活性化の取組としてこの活動が有意義であることを学んだ。

吉田英晃 (機械システム工学科 1 回生)

節分の行事を1月末に行った。行事を通じて普段ではふれ合うことのない世代の人と話す機会が得られ、新たな感受性を養うことができた。節分パーティは昨年度も行ったが、今年度は留学生も加えての開催となった。留学生の国の話も聞くことができ、新たな知識を得ることができた。

上尾航平 (機械システム工学科 1 回生)

地域からのコメント (抜粋)

令和元年度 上岡部町自治会長 赤田薫さん

私が上岡部町自治会を預かり早くも1年が過ぎようとしております。平成から令和へと元号も変わり、まさに激動の1年でした。

皆さんには、地域のために古民家を活用しながら維持管理をしていただいております。そして、多くの地域が抱える空き家問題や少子高齢化といった問題解決に向けて空き家を改修し、人と交流をしながら地域活性化のきっかけづくりをしてもらっています。年間を通して、ピザパーティーや節分祭、古民家ホームパーティ、春の太鼓祭り、秋の子どもみこしへの参加、応援や春と秋の川堀り道普請の諸行事に参加していただき、大変助かっており、うれしく思っております。

今後も継続して多数の学生さんに参加いただいて、この上岡部町、また稲枝地区を盛り上げていただき、活性化していけば良いかと願っております。

指導教員より (抜粋)

環境科学部 林宰司

昨年度に続き、住民の方々の発案でバーベキューを行うことができ、古民家の活用と地域の方々との親睦を深められたことはよかったと思います。一方で、建物の管理、特に火の使用に関する法的責任は、建物を借り受けている学生の皆さんにあります。万一の場合に備え、どのようなルール作りが必要か地域の方々とも話し合う機会を作るように心がけて下さい。

ひょうたんを含む植物の栽培が負担であるという問題については、例年、学生の皆さんから聞かれます。生き物ですからタイミングを逃すと枯れてしまったり、取り返しのつかないことになりかねません。生育の様子を見ながら世話をする必要がありますので、他人任せにならないように機動的に対応できる分担と組織作りをして下さい。

伝統野菜の栽培については、種子が引き継がれずに紛失してしまったようです。保存活動を行っていらっしゃる方に再度分けてもらって、是非とも復活させて下さい。1つの種が途絶えてしまう場合もありますので、よく考えて取り組んで頂ければと思います。関連して新しくできた種苗法を勉強する必要がありますので、これも含めて勉強会を開催しながら活動を進めて下さい。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



ひょうたん加工品



古民家建具修理

07 田の浦ファンクラブ学生サポートチーム



「復興」のその先へ！

東日本大震災で津波の被害を受けた宮城県南三陸町田の浦地区で、コミュニティ再生のボランティア活動を行っています。現地での交流イベントの企画・運営を行うとともに、活動で得た繋がりがりや経験を滋賀県内に広めるために広報活動を行っています。

TEAM DATA

チーム名：田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
代表者：長島宏祐（人間文化学部）
メンバー数：18名
指導教員：鶴飼修（地域共生センター）
活動場所：宮城県南三陸町歌津地区田の浦、滋賀県内
関係団体：NPO 法人田の浦ファンクラブ
近江楽座活動年度：[2004](#) [2005](#) [2006](#) [2007](#) [2008](#) [2009](#) [2010](#) [2011](#)
[2012](#) [2013](#) [2014](#) [2015](#) [2016](#) [2017](#) [2018](#)

PROJECT

実施事業

- (1) 定期訪問
- (2) 海の大運動会



漁師の借り物競走 (08/11)

- (3) 防災イベント



かみおかべ古民家活用計画との共同イベント (03/11)

- (4) LINKtopos2019 参加
- (5) キャンパス SDGs びわ湖大会参加
- (6) 3.11 キャンドルナイト in しが
★見出し写真：キャンドルナイト集合写真 (03/11)
- (7) 湖風祭出店
- (8) 防災ガール教育プログラム参加
- (9) 田の浦紹介動画作成

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度は1回生11人を新メンバーとし加えることができ、計18名のチームとなった。それにより、隔週で行ったミーティングでは多種多様な意見やアイデアが出てきて、活動に生かすことができた。

昨年度は、積極的に活動記録を残すことに心がけ、今年度は活動記録を滋賀県はもちろんLINKtoposなどのイベントを通して県外にも報告することができた。これまで当団体の大きな課題として滋賀県内での活動が少ないことがあったが、防災イベントの開催、キャンパスSDGsびわ湖大会参加、湖風祭出店など滋賀県内での活動も充実できた。また、海の大運動会では木興プロジェクトと未来看護塾、防災イベントではかみおかべ古民家活用計画という他の近江楽座のチームと協働することができ、近江楽座間での交流を図ることができた。

反省としては2つある。1つ目はチームの統制ができなかったことである。メンバー間での連絡が上手くいかなかった。またミーティングの参加者が固定化するなどメンバー内での活動に対する意欲の差が生じた。今後は、メンバー全員に仕事や役割を与え、責任を持って活動に参加してもらうなどの対策をとることを考えている。2つ目は地域の若者を巻き込めなかったことである。今年度から学生が田の浦の方と連絡をとるようになったが、田の浦の若者の連絡先を知らず、コミュニケーションをとれなかった。今後も活動を続けていくにあたり若者と関わっていくことがより重要だと考えられるため、来年度は田の浦の若者の連絡先を把握し、積極的に若者とコミュニケーションを図りたいと考えている。

活動を通して学んだこと (抜粋)

近江楽座に入ってから様々な面で成長できたと思いました。1つのチームの一員となり、今までしたことのないような仕事をこなし、チームに貢献していく中で運営の難しさと楽しさを知りました。来学期からこれまで自分を指導して下さった先輩方のように頼りがいのある先輩になりたいと思います。

飯原秀哉 (環境生態学科 1 回生)

田の浦へ赴いたことでわかることがたくさんありました。町の様子が震災前の状態に近づいていますが、コミュニティは以前と違うようです。震災から復興するということは、町を元どおり綺麗に整えるだけでなく、コミュニティの復活まで含まれている事がわかり、より一層復興支援に力を入れる必要があると認識しました。

森田遙 (地域文化学科 1 回生)

一緒に活動する仲間と、その意欲に私も駆り立てられて、今までにやった事のないことをやるという気持ちが湧いてくるのがたくさんありました。また、宮城県という私にとって普通に生活していれば縁もゆかりもないような土地の方と交流をすることもとても楽しいです。いつも温かく迎えて下さり、行くのが楽しみです。

隈村麻耶 (地域文化学科 1 回生)

私が一番学び、成長した瞬間は海の運動会です。海の運動会では初めて会う学生や地域の方々が多く、萎縮していました。しかし、自分にできることを積極的にしたいという思いから地域の方々や学生と協力することができ、その楽しさも知ることができました。この経験は今のわたしにとってかけがえのないものです。

守屋優作 (環境生態学科 1 回生)

地域からのコメント (抜粋)

ひま輪りの会 今野安美さん

今年は、台風やインフルエンザやコロナとかのせいでみんなには来てもらえなかったのが残念だった。みんなには会いたいけど、なんかあるといけなから。これから(新型コロナウイルスの流行)どうなるかわからないけどまたいつでも(田の浦に)来て。

指導教員より (抜粋)

地域共生センター 鶴飼修

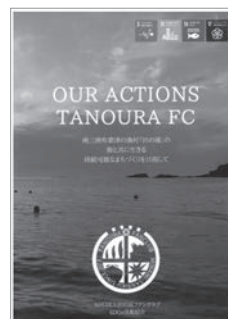
2020年3月11日の訪問は、新型コロナウイルス予防のために断念し、大学において小規模なキャンドルナイトを行ったが、学生達の想いは現地に届いたことと思う。ふりかえれば、2011年6月に田の浦に出会い、8年と9か月の時間が経過した今では、少子高齢化の最たる地域との「交流を通じた関係人口づくり」活動が展開している。地元の漁師さんのつづやきから生まれた「海の大運動会」は、地元の方と学生との協働による地域における一大イベントと進化した。学生達にとっては、大変貴重なコミュニケーションの機会、経験の機会となっている。地元のお母さん達が集まるおちゃっこ会は、おちゃっこ会を支援するお母さん達により主体的、継続的に運営されるようになった。

残念なことに、2019年度は海の状態が悪く、漁師さん達も大変苦労された年であった。そうした状況でも、地元の人達は変わらず我々を迎えてくれている。つらい状況を口にする事なく、明るく振る舞ってくれる。頭が下がる。海と共に生きる暮らしの厳しさと暖かさを感じている。

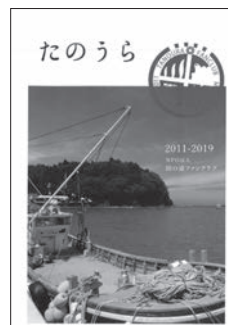
こんな状況でも、学生達はめげずに奮起した。今年度は、「情報発信」をテーマに掲げ、動画やSNSの投稿を頑張った。おすそわけファンドの寄付者集めも200口を超えた。学外の団体や個人との繋がりもたくさんつくることができた。今後の活動にむけての大きな財産ができた。田の浦は彦根から遠い。遠いからこそ、やりがいがあり、喜びが大きい。地域との出会いは運である。自身の運を信じ、その関係性を大切に育んで欲しい。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



活動報告書「OUR ACTIONS TANOURA FC」



活動報告書「たのうら 2011-2019」

<その他成果物>

海の大運動会 in 田の浦 MANUAL

海の大運動会説明会資料

クリスマス会チラシ

湖風祭チラシ

08 タクロバン復興支援プロジェクト



現地の人と共に建物とコミュニティをつくる！

2013年の台風により大きな被害を受けたフィリピンのレイテ島タクロバンで、復興支援を目的に活動しています。建物の建設を中心として、地域の人と共に、現地の文化や習慣に根ざした暮らしづくりを進めています。

TEAM DATA

チーム名：タクロバン復興支援プロジェクト

代表者：大野宏（環境科学研究科）

メンバー数：11名

指導教員：芦澤竜一、J.R.ヒメネス、ベルデホ、川井操（環境科学部）

活動場所：フィリピンレイテ州タクロバン

関係団体：San Carlos 大学

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

(1) チャペル建設ワークショップ



現地の人たちと学生による建設作業（08/06）

★見出し写真：ペイントワークショップ（08/14）

(2) タクロバンツアー



ホームステイの家族と（08/18）

(3) 地域活性化フォーラム in しが 発表

(4) NHV (New Hope Village) コミュニティ会議

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

2017年度から計画していた NewHopeVillage のコミュニティチャペル建設計画がやっと竣工したが、すぐさま台風の被害に遭い、倒壊してしまった。倒壊の原因としては、2年を目処に今の仮設建築の上にコンクリートを打ち、強度のある常設建築に生まれ変わらせる計画を立てていたが、予想を上回る台風が建設直後にきてしまったこと、また予想していた数値よりもフィリピンの竹の強度が弱かった点にある。建築学科に在籍する者としてももう少し念密に計画を練る必要があったという反省が残る。

建設後から倒壊までの間は、住民が街の会議や誕生日のイベント、政府機関のレクチャー等に利用していたという話があり、コミュニティチャペルが存在していた意義が感じられた。また、建設前と建設後で我々に対して、声をかけてくれる回数や名前を覚えて頂いている頻度などが上っており、この一年で少しずつ我々の存在が地域に溶け込んで行っている様子が受け取れた。

ホームステイ等のイベントでは、他団体と協力し、日本の学生や社会人にタクロバンの復興の現状や現地の暮らしを体感してもらう機会をつくれた。フィリピン人の貧困とは反して幸せそうに暮らす人々の生活を実際に知ってもらうことができた。またペイントイベントでは多くの子どもたちが参加し、異国からのお兄さんお姉さんとふれある良い機会となったと思う。このイベントから多くの子どもたちが移住によって遊び場を失い、時間とエネルギーの使い所を無くしていることがわかった。

今回のコミュニティチャペル倒壊は無念な結果となったが、コミュニティ全体と当団体の関係は徐々に深まりあっていると感じている。今後もコミュニティチャペル再建を含め、継続的に NewHopeVillage の方々と交流をしていきたいと思う。

活動を通して学んだこと (抜粋)

コミュニティチャペルというモノをつくり、それに伴い建設に関わった現地の住民や僕たち学生がいて、子どもたちが遊び場にしたり、ミーティングの会場になったり、礼拝堂になったり、様々なコトが生まれた。それらモノとコトが同居する空間は本当に居心地がよくて、この感覚は忘れないようにしようと思った。

岩田慧 (環境建築デザイン学科2回生)

初めての海外だった。そこでは周囲の生活環境や人が変わり、言葉や文化の違いを直接体感できた。その場にある材料や道具を工夫しながら作業をこなす術があることを知った。温かく迎えてくれた家族や子ども達との会話からは日本では考えもしない多くのことを学んだ。これらの経験を今後の活動に役立てたい。

野崎陸大 (環境建築デザイン学科2回生)

今回の活動で初めて海外に行った。見るもの、聞こえてくること、匂い、全てが新鮮で毎日新しい経験があった。不便なところは多かったが、中には日本でも真似した方がいいと思うところもあった。他にもいろいろな国に行って、いろいろな経験をして、学ぶべきところを見つけて、日本での活動に生かしたいと思った。

長野容平 (環境建築デザイン学科2回生)

地域からのコメント

New Hope Village Block Leader Marife Juano

2019年2月の台風でチャペルが倒壊してしまったことは残念でしたが、チャペルを再び建設してくれたことを感謝します。日本から多くの方がきてくれ、我々も子どもたちも楽しい時間が過ごせました。チャペルで会議やイベントが開催でき、嬉しく思います。一方で地域のコミュニティがまとまらず、掃除やメンテナンスができていないかったことに課題を感じています。今後も交流を重ね、チャペルがもう一度建つことを願います。

指導教員より

環境科学部 J.R. ヒメネス・ベルデホ

台風ヨランダ復興支援のために建てられたタクロバンのニューホープヴィレッジのコミュニティチャペルは、2019年12月24日に新しい台風によって残念なことに破壊されました。フィリピン人は台風ヨランダの後で苦しみました。苦しんだにもかかわらず、多くの人々は笑顔で、冗談を言って笑ます。常に混沌の中で生活している彼らの笑顔は私たちに、平和と幸福の瞬間がどれほど重要であるかを思い出させてくれます。このような彼らの振る舞いから私たちは学び、努力し続けなければならないでしょう。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



ペイントワークショップで作成したゲート



コミュニティチャペル

09 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト



モットーは「無理なく、楽しく！」

障がい者を有する人と学生が互いに成長することを目的に、NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディーの支援活動を行っています。活動を通じて、障がい児・者を支える地域づくりを推進することも目指しています。

TEAM DATA

チーム名：ボランティアサークル Harmony

代表者：真野智詩（人間文化学部）

メンバー数：12名

指導教員：中村好孝（人間文化学部）

活動場所：学内、彦根市、東近江市 他

関係団体：NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

(1) 定例活動



油絵制作 (05/18)

(2) 宿泊体験

(3) クリスマスコンサート

★見出し写真: ゆるキャラと一緒にダンス (11/30)

(4) バス旅行



ブドウ狩り体験 (08/11)

(5) 定例会議

(6) 66まつり

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

Harmonyの活動は例年に比べ、カヌー体験や夏の宿泊体験がなくなり、縮小化されているようにみえますが、定例活動の機会が増え、油絵制作などに費やす時間が増え、良い作品ができました。

それに伴い、障がい児・者と学生とのコミュニケーションが増え、新たな人格形成の場としてふさわしい人間関係を築くことができました。

定例活動のみならず、メロディーの方々の御支援のおかげで、クリスマスコンサートや宿泊体験も問題なく終わることができました。

今後の課題は、まだ会計などの引き継ぎミスやケアレスミスが絶えなかったため、グループ全体に情報の開示を行うとともに、これからの活動がますます発展するよう、地域へのPRをしっかりとしていきたいです。

活動を通して学んだこと (抜粋)

これまで障がいをもった子と関わることがなく、初めは難しいのかなという思いが強かった。けれど Harmony の活動を通して、そんなことない、普通と変わらないんだと気づくことができました。むしろ、私にはないものをたくさん持って友達のような関係になれることがとっても楽しいです！

木原明日香 (人間看護学科 1 回生)

毎月の定例活動では、茶道や油絵を、障害を持つ人達と一緒に活動することで互いに成長し合えると共に、新たな発見がありました。他にも、宿泊体験やバス研修、クリスマスコンサートの開催を通して、コミュニケーションの大切さ、思いやりの気持ちを持つことを学びました。

船原瑞穂 (生物資源管理学科 2 回生)

障害を持った方と触れ合うことで障害について関心が高まりました。また活動を通して子どもたちが楽しそうにしている姿を見て私も元気をもらいました。障害を持つことはマイナスではなく1つの個性なのだと思うようになりました。今まで受け継がれてきた Harmony の温かさを大事にして活動に取り組んで行きたいです。

佐野文亮 (環境生態学科 1 回生)

周りの人に協力してもらうことの大切さを知りました。代表を務めさせていただきましたが、職務を全うできたのは、同年代がいなかったために後輩や先輩、協力団体の皆さんなど多くの人が私のことを支えてくださったおかげです。この経験から協力すること、1人で抱え込まずに助けを求めることの大切さを知りました。

真野智詩 (環境生態学科 3 回生)

地域からのコメント

NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー 矢野なみこさん

Harmony と一緒に活動して 17 年ほどになります。当初から障がいをもったわが子らを色眼鏡で見ることなく、自然に接してくれる学生さんたちに感謝を覚えます。月一回の定例活動(創作活動・油絵・茶道など)とコンサート・お泊り会などのイベントと、楽しいと思える活動がいろいろあります。わが子にとって自然に接してくれる学生さんたちとの活動は、とても居心地の良いひと時のようです。リラックスして油絵を製作している時はとてもいい表情で集中して活動しています。指導して下さる美術の先生の指導助言もあり、公募作品展「びかつ to アート展」に 5 年連続で入選しています。展覧会で作品を皆さんに見ていただくことも励みになっています。学生さんたちと共に活動し共に成長しあえる時間はとても貴重です。これからこの活動が続くように願っています。

指導教員より

人間文化学部 中村好孝

毎年、交流センターで行ってきたクリスマスコンサートは、今年度は会場がとれず学外のホールで行った。いつもより小さな会場になってしまったが、近いので今年は来ることができたという来場者もいたと聞いたので、良いこともあったようだ。このコンサートの日はお泊り会とセットになっているので遊びに来てくれる OB もいる。なかには福祉職で働いている OB もいて嬉しいことだし、社会全般に理解者が増えることも大切だと思うので、ハーモニーで活動した学生には福祉でなくても今後それぞれの分野で活躍してもらえれば嬉しい。

今年度も、連携する NPO メロディーをはじめ地域のみなさまにお世話になりました。ありがとうございます。実際のところ教員よりはるかに丁寧に学生を見守って、アドバイスをいただいたり、良いところがあれば褒めてくださっていることに感謝しております。障がい児・者と一緒に活動するという部分だけでなく、地域の大人と接する機会としても、本活動は学生にとって貴重な経験になっていると思います。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



クリスマスコンサートポスター



クリスマスコンサートパンフレット

10 BAMBOO HOUSE PROJECT



生きる自然は地域を育む

全国、どこにでもある放置竹林。この問題を地域の方々と学生が協力して解決しようという取組です。滋賀県湖南市菩提寺区の竹林で、毎年竹林整備を行い、その際に出た竹廃材を再利用し、子どもや地域の方々が集まる憩いの場となることを目指します。

TEAM DATA

チーム名：BAMBOO HOUSE PROJECT
代表者：佐藤允哉（環境科学部）
メンバー数：34名
指導教員：陶器浩一（環境科学部）
活動場所：湖南市菩提寺
関係団体：菩提寺まちづくり協議会
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

(1) 竹廃材の撤去（竹チップ制作）



竹チップ運搬の様子（10/19）

(2) 週末ワークショップ

(3) 環境学習講話（事前学習）



授業の様子（11/27）

(4) 甲西北中学校合同竹林整備

★見出し写真：竹刈り（12/06）

(5) 環境学習講話（事後学習）

(6) サイン計画

(7) ポートフォリオ作成

(8) 菩提寺まちづくりフェスタへの出展

(9) Nature School

(10) 竹林整備

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

このプロジェクトは、継続した活動が重要である。

まず4月に菩提寺まちづくり協議会地域活性化委員会の皆様と1年間の活動内容の共有を行った。そして今年度も昨年と同様、竹の伐採に最適な10月から12月の3か月間に渡り、週末を利用してワークショップを行うことにした。週末ワークショップに合わせて竹廃材の除去等を行うことで、学生と地域がお互い無理なく継続して活動を行うことができたのではないかと考えている。また、今年度は物事が大きく動いた年でもあった。一つは、地域の竹林整備範囲が広がったこと。長年活動してきたことが地域に根付いてきて、地域の方より「自分の竹林の整備もお願いしたい」といった声が多数上がり、地域の区長さんより依頼されることになった。もう一つは参加学生が多面にわたったことである。嬉しいことに、取組を知って立命館大学の学生が参加してくれた。また、学内でも生活デザイン学科の学生の参加も見られた。悪天候で延期になってしまったが、国際コミュニケーション学科の留学生からも申し出があった。これら全て、これまでの先輩方や地域の方々との地道な取組が、功を奏して生まれたことである。

さらに、制作物に対しては段々と解体が近づいていると感じている。来年度は大きな変換点になると考えている。ただ解体し更地にするのではなく、段階的に解体・再構築することで、既存の建築を残しながらも、新たな場所を築いていくという方針の元、これからの活動でも、竹建築の姿・形は変わっていくことが考えられるが、モノが変化しても場所としてはいい環境を残していきたいと考えている。

この「竹の庭」が地域の人々に愛され、地域に寄り添ってこの場が続いていくように、これからも継続して活動を行いたい。

活動を通して学んだこと (抜粋)

竹を切り倒し、教わった結び方で竹を結び、それを足場にしていって高いところに登ったりする作業はどれも初めてのことでとても勉強になりました。自分は住居を学びたいと思い生活デザイン学科に入ったので、今回建築学科のプロジェクトに参加したのは貴重な経験になりました。

守屋美希 (生活デザイン学科1回生)

活動に参加させていただき大変貴重な体験をさせていただきました。改めて建築のリアルさを実感させていただきました。放置竹林の現状とそれに対する学生としての地道な活動には、今までの先輩方の苦勞があったんだと感じられました。今後とも機会がありましたらぜひ参加させていただき、学びを深くしたいと思います。

青山剛士 (立命館大学 理工学部建築都市デザイン学科3回生)

3年目3回目の参加となった今年、後輩に指示を出しプロジェクトを進めていく責任ある立場になりました。主体的に行動していく中で、大変なこともたくさんありましたが、その分終わったときの達成感は大きなものでした。地域の方々と交流も身近で体験でき、プロジェクトが地域に支えられていることを改めて実感できました。

津田和樹 (環境建築デザイン学科3回生)

地域からのコメント

菩提寺まちづくり協議会 地域活性化委員会 委員長 浅井基義さん

2012年度から菩提寺まちづくり協議会が借用して管理しています区の竹林に、滋賀県立大学の皆様と共同で始めたバンブーハウスプロジェクトも今年で7年が過ぎようとしています。一般財団法人環境イノベーション情報機構の方や朝日新聞にも菩提寺まち協の取材を受ける機会がありました。これも、毎年継続して竹林に新しい施設や補修、地元の中学生に環境講座の開催していただいていることにより、バンブーハウスが皆さんに認知してもらえる、足掛かりとなっており大変感謝しております。今期も10月～12月にかけて多くの学生の皆さんに整備に来ていただき、施設の新設と補修をしていただき、ありがとうございました。県立大学との共同の事業も今では、まちづくり協議会の事業として、地域の皆さんにも認められていますので、今後とも継続して御協力をよろしくお願いいたします。

指導教員より

環境科学部 陶器浩一

昨年度と同様、今年度は10月～12月にそれぞれ週末ワークショップ、地元中学校への出張授業など、一年を通しての継続的な活動を行った。現地では傷んだ制作物の補修および新しい制作物の制作、サインの設置、廃材の撤去を行い、以前に増して魅力的な場となってきている。継続した活動が地元中学校にも認められ、総合学習としてのカリキュラムにも取り入れられるようになった。

まちづくり協議会の方々と連携した継続的な活動により、この場所の存在と我々の活動が地域の中に根付いてきている。竹林整備範囲の拡大は、これを顕著に示しているものではないだろうか。それ以外にも、以前に増して竹林整備のモデルケースとして見学の申し込みが多くなったと聞いている。この活動は継続性が最も重要である。今後も地道な活動が続いてゆくことを願っている。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



環境学習講話授業プリント



竹建築ネームプレート



ポर्टフォリオ

11 Taga-Town-Project



学生目線で多賀のいいところ発信中

多賀町を拠点に学生からみた多賀のいいところ・面白いところを発見・発信しています。2019年度は、2種のワークショップ(写真WS・星空観察会)と情報発信(店舗のフリーペーパー作成・SNSやHPの更新)、そして町内のイベント協力を行いました。

TEAM DATA

チーム名: Taga-Town-Project
代表者: 龍見瑞季(環境科学部)
メンバー数: 5名
指導教員: 迫田正美(環境科学部)
活動場所: 犬上郡多賀町
関係団体: 多賀町立文化財センター 他
近江楽座活動年度: 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

(1) 星空観察会



紙コップで作るプラネタリウムの工作 (09/22)

(2) 写真ワークショップ・写真展



絵馬通りでの写真ワークショップ (07/15)

★見出し写真: ギャラリー喫茶おとくらでの写真展 (10/07)

(3) フリーペーパー作成

(4) YOBISHI プロジェクトのイベント協力

(5) 情報発信

1年の活動まとめ・考察(成果と課題)(抜粋)

今年度は昨年より人数が増え、より多くの大きい事業を行うことができた。事業①の星空観察会では合計36名を集客することができ、参加いただいた方からも大変好評だった。「来年度以降も毎年開催してほしい。」との声もあった。イベント開催日はあいにくの雨だったが途中晴れ間が見え、外に出てレーザーポインターを用い、星について解説していただくこともできたのでよかった。反省点としては、イベント保険を申し込むのを忘れており、当日朝に慌てて入ることになってしまった。また、人数が多くなった場合の対応を考えていなかった。

事業②の写真ワークショップ・写真展については、昨年と比較すると、ワークショップの開催頻度は少なかったが、写真展は2019年3月~2019年11月まで多賀町内だけでなく、彦根市高宮町にあるギャラリー喫茶おとくらでも開催することができた。

事業③のフリーペーパーは昨年と比較すると、あまりできなかった。デザインソフトを使える人数がメンバー内に少なくなり、1回生への普及があまりできなかったためである。来年度は、illustrator 教室を行い、成果物を分担し、たくさん作れるようにしたい。

事業④のYOBISHI プロジェクトの手伝いは、今年からはじまった事業だが、大変多くの活動に参加することができた。反省としては、受動的な手伝いが多く、企画段階から関わることができるメンバーが少なかった。来年度以降は、YOBISHI の会議にもメンバーが積極的に関わられたらよいと考えた。

事業⑤の情報発信は、HPとSNSを使い分け利用することができた。しかし、HPの写真が無断転載されたことがあり、右クリックで写真を保存できないようプラグインを入れることになってしまった。

総括として、お手伝いが多くなり、主催イベントの数が減ってしまった。成果物の数も昨年より減ってしまったので、来年度以降は、illustrator 教室を開催するなどして、成果物がたくさんできるようにしたい。

活動を通して学んだこと (抜粋)

YOBISHIさんと共同で魅力的なイベントに参加し、お手伝いをしつつ知らなかったことを沢山吸収できた。自分たちが主体となって企画・運営した星空観察会では、子どもたちが楽しんでいる様子を見ることができ、今後もこのようなイベントを積極的に実施できるよう多賀町のことをもっと深く知ろうと思った。

久木絢加 (国際コミュニケーション学科1回生)

活動を通して多賀町の方言や歴史、食文化など地域の文化を深く知ることができた。地域のイベントのお手伝いや写真の依頼などを通して地域の方とのコミュニケーションの大切さを学んだ。特に今年は初めて小学校でイベントを企画し運営した。新しいことにもチャレンジしていくことが大切だと学んだ。

忍田奈津子 (環境生態学科3回生)

TTPの活動を通して多賀町の人の温かさや明るさ、食のおいしさ、古い町並み、自然の豊かさなど、地域に深く入りこんだからこそ知ることのできる多賀の魅力を発見できた。今後は発見した魅力を多賀町内外に広く発信し、多賀町の活性化に貢献できるような活動を引き続き行っていきたい。

小林すみれ (地域文化学科1回生)

今年度は、TTPの活動をSNSで見えてくださった地元の方に、稲刈りやシイタケの菌打ちなどのイベントの際、写真を撮りに来てほしいと頼まれ出張撮影することがあった。我々の活動がだんだん地域に根付いてきたのではないかと感じ嬉しく思った。引き続き町内や町外、そして学内に活動を普及していきたい。

龍見瑞季 (環境生態学科3回生)

地域からのコメント (抜粋)

多賀町役場生涯学習課 高橋進さん

今回のTTPによる「大滝小学校で満天の星を見よう」では台風の接近などで実際の星を十分に見ることはできませんでしたが、星のお話やTTPの皆さんによる工作などで楽しいひと時を過ごしていただくことができました。

これまで天文学の研究や普及という、理科教育を目的としたものが多く、今の世界(宇宙)がどうなっているのか、どうしてできてきたのかを学ぼうというものでした。しかし最近は星空や宇宙を見たり感じたり知ることによって逆に地球のすばらしさや環境の大切さを知ったり、自分の住んでいる地域のすばらしさを知ることの大切さが言われるようになってきています。大滝学区は過疎化が進みつつある地域ですが、すばらしい自然があり星空もとても美しいところです。星空を見上げることを通じて暮らしている地域のすばらしさを感じること、地域の歴史や特色を学んでいくことが大切かと思われます。

また今回の星空観察会では、大滝学区の児童の皆さんとともに多賀町内でも平野部にあたる多賀学区の皆さんも多く参加され、星空や宇宙を通しての交流が進められました。これからもこうした取組を通して地域が更に活性化されていくことを願っています。

指導教員より

環境科学部 迫田正美

今年度は限られたメンバーにもかかわらず、昨年以上に活動の質が向上したように思います。夫々のメンバーが多賀の町、多賀の人々との交流の中から、学生として、学生だからできることを、夫々に工夫しながら模索し、数々のイベントや会合に積極的に参加することで、地域の人たちとのつながりを深め、結果として様々な媒体を用いた質の高い情報発信につなげ、フォトブックの作成などもできたことは良かった。個々のメンバーが夫々に努力と工夫をした結果だと思えます。来年度以降の活動にうまくつながられるようがんばってください。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



写真展チラシ



フリーペーパー (手趣)

<その他成果物>

写真ワークショップチラシ
 星空観察会チラシ
 星空観察会工作作り方のミニ本
 メンバー募集チラシ
 Taga-Town-Project 紹介ポスター
 YOBISHI 関連イベントチラシ
 YOBISHI イベントの缶バッジ

12 おとくらプロジェクト



人と人とを繋ぐコミュニティスペース

旧中山道高宮宿をより元気にすることを目的に活動しています。築200年の古民家で学生が改修してできたコミュニティスペース「ギャラリー喫茶おとくら」の運営を軸とし、地域行事への参加、イベントなど幅広い活動を行っています。

TEAM DATA

チーム名：おとくらプロジェクト

代表者：浅井恵、石神愛海（人間文化学部）

メンバー数：33名

指導教員：迫田正美（環境科学部）

活動場所：宿駅 座・楽庵、彦根市高宮町

関係団体：高宮経友会

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

(1) 喫茶活動

★見出し写真：メニュー講習会（06/09）

(2) イベント活動



第8回おとくら寄席（06/02）

(3) ギャラリー運営

(4) 広報活動

(5) 高宮小学校授業協力



授業の様子（02/20）

(6) 10周年記念冊子の作成

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は1回生が18名入り、大幅にメンバーが増えたことが大きな変化である。メンバーが増えたことで、イベント参加人数や普段の喫茶営業のシフト人数が増え、これまでよりも活気づいた。具体的な例としては、高宮小カーニバルへの参加である。参加したことで小学校とのつながりができ、高宮小学校3年生の授業協力の依頼を頂いた。小学生におとくらプロジェクトを知ってもらうきっかけとなり、小学生との交流を深めることができた。このように交流の範囲を広げることができ、加えて多くのメンバーが参加し共に活動を行うことで学年を超えて仲を深めることができ、おとくらプロジェクト全体としてとても良い雰囲気を作ることができた。そして、2・3回生はもちろん、1回生にも役割を割り当てることで、学年に関係なく、自分で試行錯誤して行動に移す力を培うことができたと考えられる。

また、今年度はおとくらプロジェクトが10周年を迎える節目の年であった。10周年記念事業として主に5つの事業を実施し、すべての事業を有意義なものにすることができた。メンバー一人ひとりが役割を持ち中心となって取り組むことで、おとくら全体で大きな企画・イベントをつくりあげることができたと考える。「10周年記念事業を成功させたい!」という強い思いが、記念事業の成功に結びついたのではないかと感じる。

改善すべき点としては、おとくら主体の、高宮町に住む人を巻き込んだイベントを実施できていないという点があげられ、本プロジェクト主体のイベントを創り上げることを来年度は目指したい。

今年度も、おとくらの活動を通してたくさんのお会いがあり、人とのつながりの大切さを学んだ。他ではできないような経験もさせていただいた。また、おとくらプロジェクトが10年目を迎えることができたのは多くの方々のサポートがあってこそだと、改めて強く実感した。おとくらを支えてくださっている方々への感謝を忘れずに、メンバー全員で楽しみつつ、おとくらの役割を考えて活動していきたい。

活動を通して学んだこと

私はおとくらプロジェクトで人との関わりの大切さを学びました。おとくら喫茶にはお客さんが来てくださり、たくさん話をすることができます。そこでは、いろいろな知識や思いを持った人たちと出会うことができるため、学ぶことが多くあります。

井上美樹（生活栄養学科1回生）

今年度はメンバーが増えいろいろなイベントに参加させていただくことができ、様々な人と触れ合う機会があった。おとくらの活動を通して子どもからお年寄りまで幅広い年齢層の方とコミュニケーションをとることができとても良い経験になった。

後藤千尋（生活栄養学科2回生）

僕はこの活動を通して「人との繋がり」を学びました。なぜならこの活動によって様々な年代の方々と出会い、様々なことを学び、また体験することができ、その上、一度しか会わないだろうと思っていた方とおとくらを通して偶然にも数度出会うなど人との繋がりを感じることが多かったからです。

宮垣文輔（環境生態学科1回生）

他では出会うことのない様々な方と出会い、たくさんの刺激を受けた。また、自分たちが考えて、様々な企画をしたり依頼されたことに対して準備をしたりする経験を積むことができ、行動力が身についたように感じる。今後も、人とのつながりやおとくらでの貴重な経験を大切に、活動を続けていきたい。

嶋田彩花（生活栄養学科2回生）

地域からのコメント

おとくら家主・おとくら応援隊長 加藤義朗さん

おとくらの事を一番知っている家主として、年度当初より「2019は、おとくら10周年イヤー」何かしましょうよとお願いました。みなさんの発想で、本当にいいイベントになりましたね。また、当日花束のプレゼントもしていただきうれしかったです。

いっぱいみなさんと行動を共にしてなぜおとくらが10年続いたか？答えがわかりました。それは、メンバーが変わってもみなさんがおとくらで楽しんでいるから！今年は、たくさんメンバーが増え、久しぶりに男子も入り雰囲気最高です！

「まだまだおとくら進化中」を合言葉にこれからも楽しんでください。そしてお節介なおっちゃんの私も仲間に入れてください。最後になりましたが、10周年 おめでとう。

指導教員より（抜粋） 環境科学部 迫田正美

今年度は活動10周年という記念すべき年となりました。この記念すべき年を迎えること、そして充実した年にできたことは『継続は力なり』という、おとくらのモットーを生かしたからこそ、また歴代のメンバーたちや地域の人々との協働の賜物だと思えます。

『十周年記念誌』の編集と発行については、OB・OGやお世話になった方々からも寄稿いただき、講習会を開催しながらメンバー全員でそれぞれのページを工夫してデザインできたことは大きな成果でした。レイアウトの統一や原稿の編集など、とても苦労した記念誌ですが、最後までやり遂げたことはきっとこれからの活動にも大きな刺激となることでしょう。

年度末には新型コロナウイルスが発生し、イベント企画の中止という事態もありました。残念なことですが、あわただしい中でも適切な判断ができたのではないかと思います。今後も地域で支えていただいている人々や、ギャラリー、コンサートに出演、出演していただいている方々とのつながりを大切に、感謝の気持ちを忘れずに、さらなる活動の広がりを見せてくれることを期待します。

DELIVERABLE 成果物／制作物



おとくらつうしん（4月号～3月号）



おとくら10周年記念冊子

<その他成果物>

おとくら寄席チラシ
ギターワークショップチラシ
おとくら10周年イベントチラシ
おとくら10周年記念パーティー案内
湖風祭チラシ

13 政所茶レン茶`ー



一緒にお茶づくりしませんか？

滋賀県東近江市政所町にて、お茶づくりを通して政所の魅力を伝えていきたいと思い活動しています。本学の授業をきっかけに結成されました。学生たちで茶畑をお借りし、お茶づくりから販売までを行い、地域の魅力を発信しています。

TEAM DATA

チーム名：政所茶レン茶`ー
代表者：寺前翼（環境科学部）
メンバー数：21名
指導教員：上田洋平（地域共生センター）
活動場所：東近江市政所町
関係団体：政所茶縁の会
近江茶座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

- (1) お茶づくり
★見出し写真：茶摘み（05/18）

- (2) お茶販売



新茶祭（06/23）

- (3) イベント
(4) おとくらコラボ
(5) 甲賀市新規就農茶農家と交流
(6) SDGs 動画制作プロジェクト



動画撮影（10/19）

- (7) SDGs びわ湖大会

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

お茶づくりにおいて、今年度は茶工場のアクシデントの影響で煎茶は例年の半分程度しか収穫できなかった。毎年畑の状況が変化する中で、臨機応変に計画を変更することができず、作業が遅れてしまうことがあった。そのような中で、茶レン茶`ーの畑の所有者である白木駒治さんの別の畑の農作業をお手伝いする機会があり、その作業の丁寧さに感心した。それらを参考に、よりよい茶を作るためにも計画的かつ確実な作業を心掛けるようにしたい。

販売においては前年よりも販売回数を増やすことができ、また新たなイベントにも積極的に参加したため新しいつながりを作ることができた。お客さんにも積極的に話しかけ、政所茶やその産地である奥永源寺地域に興味を持ってもらうことができたと考えられる。また、今年度生産できたお茶が少なかったこともあり、そのほとんどを売り切ることができた。

さらに今年は、県内最大のイベントであるイナズマロックフェスに出展しお茶をPRすることができた。これは、茶レン茶`ーとして政所の知名度向上や魅力発信に寄与することができ、自分たちの活動を政所地域に還元できたと思う。

Eプロジェクトとして今年は、政所茶を題材にした動画を製作することができた。当初、この活動は茶レン茶`ーとしてではなく個人として始めた活動であったが、結果として政所茶や茶レン茶`ーをPRできる動画ができ上がった。しかし、この動画の撮影を始めたのが、10月頃であったため、お茶づくりを余すことなく伝えることができなかった。そのため来年度は、1年を通して動画を撮影し、より内容を深掘した動画を作りたいと考えている。

今までどおりの事業だけでなく新しい事業にも挑戦し、自分たちの活動が政所のさらなる発展の歯車になれるよう努めていきたい。

活動を通して学んだこと

政所茶レン茶[®]ーに参加する前は、何の知識も無かったが、活動を通じて、政所茶の現状やお茶畑を管理する大変さについて知ることができた。だが、交流会やイベントなどで自分の勉強不足を痛感することが多かった。今後はよりいっそう知識の底上げに務め、活動に生かしていきたいと思う。

東彩乃（地域文化学科1回生）

大学に入るまで自分がお茶をつくるとは思っていませんでした。日々の活動を通して政所茶を作ることのみでなく、地域の方々との交流や実際の販売など、とても貴重な体験を重ねています。地域との関わりや販売を行うことの難しさや楽しさは活動を行ってなければわからなかった事だと思います。

森井由希（地域文化学科1回生）

友人に誘われ参加した団体ですが、お茶の収穫・イベントへの出店など、今までどおりに暮らしては経験し得なかったであろう、実りのある時間を過ごせたと感じています。また話に聞くだけではなく、実際に場に入ることでも、難しさも含めた地域活性化の実情や地域の方々の想いにも触れ、考えを深めることができました。

小竹智菜（地域文化学科1回生）

地域からのコメント 政所町住民 清水美紀子さん

若い人(大学生)が政所という小さな集落到定期的に通ってくれているだけでうれしく思っています。地元出身の人たちの多くが盆やお正月くらいしか帰ってこないなか、大学生が1年を通して政所を訪れているのはとてもありがたいです。政所茶の生産農家さんたちも、若い人が同じようにお茶づくりに携わっていることで、張り合いも出ていると思います。これからも一緒に頑張っていきましょう。今後はお茶づくりだけでなく、政所の地域活性化にもさらに協力してもらえると助かります。

指導教員より（抜粋） 地域共生センター 上田洋平

声がかかればとにかく行ってみよう、見てみよう、やってみよう、という感じで、まさにチーム名に恥じない姿勢が好ましくて、いろいろな話をもちかけてしまってちょっとスマナイな、と思わないでもないのだが、行った先で次につながることを見つけてるのが頼もしい。この傾向は次の世代にも引き継がれていこうなので「茶レンジ」精神はこのチームのDNAになっているとみた。政所茶のようないわゆるシングルオリジンのお茶については年々関心が高まっており、そういう意味では追い風である。この風をとらえてさらなる展開につなげてほしい。SDGsの達成に寄与するEプロジェクトにも名乗りを挙げているが、SDGsは持続可能な世界・社会について企業と語る場合の共通テーマになりうる。さいわい茶レンジ[®]ーの活動とそのフィールドには、SDGsについて企業と連携して取り組める要素がたくさんある。呼べば応える企業もあるだろうから、そうしたことも是非検討してほしい。

DELIVERABLE

成果物／制作物



はっぴ

14 木興プロジェクト



建築×被災地&復興まちづくり

東日本大震災を受けて、滋賀県立大学の建築デザイン、生活デザインの学生によって立ち上げられた震災復興プロジェクト。建築・デザインを学ぶ私たちに何ができるのか、何かしなければという思いをきっかけに、ものづくりによる復興支援を目的に活動しています。

TEAM DATA

チーム名：木興プロジェクト
代表者：朝日ひかる（環境科学部）
メンバー数：5名
指導教員：J.R.ヒメネス、ベルデホ（環境科学部）
活動場所：宮城県南三陸町歌津地区田の浦
関係団体：NPO 法人田の浦ファンクラブ
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

- (1) サマースクール
★見出し写真：鳥居の塗装作業（09/15）

- (2) 納屋プロジェクト



作業の様子（05/15）

- (3) 定期訪問



クリスマスイベント参加（12/21）

- (4) 海の大運動会

- (5) キャンドルナイト

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

震災から9年が経ち、被災地では復興庁支援による復旧事業が終わりを迎えてきている。田の浦でも生活基盤の復興が終わり、木興プロジェクトの活動も復興から少しずつ町おこしへと変わっていった。その中で、どのように活動していくべきなのか、2年前から団体の方向性についての話し合いを重ね、今年度で活動を終えることに決まった。

発足当時から「今しかできないことをする」という言葉を大切にしてきた。今年度も、木興プロジェクトだからこそできること、求められていることは何かを考えた。そして、今までの活動で放置されてきた木材の処理、交流センターのメンテナンス、鳥居の塗装を行うことにした。今回塗装した鳥居は、震災当時流されてしまい、いつもお世話になっている佐藤功一さんにより再建されたものだ。しかし、その再建からも月日がたち、塗装が薄くなっていたので塗装作業を行った。鮮やかによみがえり、海辺に建つ姿は本当に美しかった。今年も多くの漁師さんを含む地域の方に御協力いただいて作業を成し遂げることができた。これは、9年間で築き上げてきた関係であり、田の浦の方々に本当に感謝申し上げたい。

木興プロジェクトとして、まだ課題も残っている。交流センターのメンテナンス。今後修繕が必要な時に誰が行うのか、予算はどこから出すのか。また、特につながりが深かった漁師さんや大工さん方と、来年から新たに田の浦を訪れる学生とのつながりが今後薄れていくのではないかと不安もある。

今後は、9年間の活動をまとめたアーカイブ制作を進めていく。OB、OGとコンタクトを取りつつ、これまでの活動を振り返り、じっくりと時間をかけてまとめていく。被災地の住民の方とのつながりや建築学生として行ってきた活動の詳細内容などを含めた、密度の濃いものにしたいと考えている。

活動を通して学んだこと (抜粋)

今やるべきことは何か、どのようにするのがベストかを常に考えながら行動した。代表としての行動や施工の段取り等、初めての経験が多く苦戦したが非常に多くのことを学び、成長することができた。本当にたくさんの方々には助けられた1年だった。今後もこのプロジェクトでの出会いを大切にしていきたい。

朝日ひかる (環境建築デザイン学科 3 回生)

これまでの活動をどのように締めくくり、形にして残すかを考えた。今年度は作業規模が小さかったが、例年どおりあたたかい差し入れをくださり、作業を見に来て下さり、沢山喋ることができた。田の浦に会いに行くことは田の浦の方が感謝して下さることと同様、私にとっても大きなエネルギーを与えてくれるのである。

西村実穂 (環境建築デザイン学科 3 回生)

何を以って復興なのかを知るため、私はこの団体に入りました。初めは地域の方とうまく話せていませんでした。しかし、メンバーに協力してもらい、諦めずに地域の方と料理やイベント交流などコミュニケーションを続けた結果、少しずつ話せるようになり、私は「精神的な繋がり」が重要だと知りました。

辻本開星 (環境建築デザイン学科 3 回生)

地域からのコメント

千葉昇一郎さん

今年も田の浦に来てくれてありがとう。ペンキを塗ってくれて、立派に蘇りました。3.11 はコロナウイルスでなくなってしまっただけで、またきてね。

三浦清登さん

私は、魚を採って生計を立てています。滋賀県立大学木興プロジェクトの皆さんには、いつも感謝しかありません。震災で暗い気持ちでいる私たちの心とこれからの生活を明るくしてもらいました。本当に大好きです。これからも長く付き合っていきたいです。また会えるのを楽しみに待っています。

指導教員より

環境科学部 J.R. ヒメネス・ベルデホ

今年も、学生たちは 2011 年 3 月 11 日の津波被害を受けた東北地方での活動を続けました。昨年と同様、9 年前に自分たちの生活が大きく変わってしまった田の浦地区との交流を行い、建物のメンテナンスと清掃活動を行いました。

私がこの報告を書いている時、東日本大震災の惨事から 9 年目の慰霊祭と同じ週に WHO は世界がパンデミックに陥っていると宣言しました。9 年前の田の浦地区のように、今、私たちの生活は突然変わりました。私たちは普通に日常生活を送っていますが、どのような事態が「ダンテの地獄」になるかを忘れていません。しかし、人間は常に混乱に直面し、理解していないこと、未知のものに力強く立ち向かいます。そして、その力を維持するためには、過去とそこから学んだ教訓を忘れないことが重要です。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



納屋プロジェクト (建具の制作)



鳥居の塗装

<その他成果物>

廃材の処理

15 未来看護塾



地域みんなの健康守り隊！

地域に住むさまざまな人々の交流や病院でのリラクゼーション活動などの健康支援活動を通じて、心も身体も健康にその人らしく生きることを志向するとともに、未来の看護のあり方を考えていきます。

TEAM DATA

チーム名：未来看護塾
代表者：青柳光哉（人間看護学部）
メンバー数：170名
指導教員：伊丹君和、米田照美、関恵子、千田美紀子（人間看護学部）
活動場所：学内、彦根市、滋賀県内
関係団体：彦根市立病院、特定非営利活動法人NPOぼぼハウス 他
近江楽座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

- 海の大運動会でのボランティア活動
★見出し写真：ハンドマッサージ（08/11）
- ビバシティ彦根「応援！生き生き健康生活！」（生き生き健康支援活動）



ちびっこ広場（09/29）

- 県大にこにこ健康広場
- 彦根市立病院ふれあいまつり
- 湖風夏祭、湖風祭 ちびっこ広場出展
- NPO ぼぼハウス主催イベントのスタッフボランティア
- 野瀬町防災訓練への参加
- 森のお家にてプラネタリウムイベント参加
- 彦根市立病院 院内デイケア
クリスマス会、新年会参加
- NPO ぼぼハウス クリスマス会参加

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度の未来看護塾は、幹部メンバーを増やすことと、年間計画を立てて、ミーティング予定を知らせておくことの2点に力を入れた。その結果、月1回のミーティングの参加者が大幅に増えた（1回生の参加者は昨年平均2人から25人に）。幹部メンバーを増やし活動に参加できる人数を増やすことは、活動の幅を広げることに繋がった。様々なアイデアが生まれ、県大にこにこ広場を開催するきっかけも、そこから案が出ている。

一方で、課題もいくつか浮かび上がってきた。大きく二つある。まずは1回の病院ボランティアの参加者が多くなりすぎてしまったことである。例えば小児ボランティアでは季節や子どもの状態によって、遊ぶことのできる子どもの数が少ない時がある。そこに大勢の学生が押し寄せてしまうと、人見知りの年齢の子どもに威圧感を与えてしまいかねない。また、参加する1回生が増える一方で、緊張感が薄れてしまうこともあった。今年度多かったのが、ボランティア直前になって休みを伝える人がいたことや、ボランティア自体を忘れてしまう学生がいたことだ。2点目は、人数が増えたことでルールがあいまいになっている節が多々あることは否めない。もう一度全員でルールについて確認する時間を設ける必要があるだろう。

そしてもう一つ忘れてはいけないのが、新型コロナウイルスの流行である。この2・3月、感染拡大防止のために、活動を自粛しなければならない決定となった。本来であれば人々の健康を守るために活動するはずの未来看護塾が、このようなパンデミックに際して何もできなかった。これはとてもショックなことである。来年度に向けての課題として、いつ起こるかかわからない災害やパンデミックがあった際にどうするかを、関係団体で集まって確認すべきだと考える。たとえば医療機関の場合、社会資源である我々のようなボランティアが活動できなくなることで、患者さんや地域の方に与えてしまう影響も考えていく必要がある。

活動を通して学んだこと

地域に住むさまざまな方々と関わらせていただく中で健康状態や年齢、個性を理解する重要性を学び、同時に地域が求めるニーズは自分の足で現地に入ることによりよく見つかるものと学んだ。また、プロジェクトを通して自分の中で、看護に対する思いが徐々に利用する相手中心になっていくことを感じた。

青柳光哉（人間看護学科2回生）

特にコミュニケーションの面で学びを深めることができた。また、活動を通して主体的に行動する大切さを学ぶことができた。これらの経験を人生のさまざまなところで生かしていきたい。

松島桃子（人間看護学科2回生）

彦根の地域の方々だけでなく、様々な場所で様々な年代の方と接する機会があり、普段の大学生活だけでは体験することができない経験ができた。活動の中でいろいろな方からのありがとうという言葉や笑顔を見ることができ、こちらが元気を与えてもらった。

赤江美紅菜（人間看護学科2回生）

地域からのコメント 彦根市立病院 藤井裕子さん

未来看護塾の皆さんには、病院内デイケアでお手伝いいただいています。認知症の患者さんに温かく手を添え、寄り添い、行事やゲームでは大いに盛り上げていただき、ご家族も驚かれるような患者さんの笑顔がたくさん引き出してもらっています。また、クリスマス会では、プレゼントを用意していただき、患者さん同様にとっても嬉しい気持ちになりました。院内デイケアの開催にはなくてはならない存在として、感謝しています。

指導教員より（抜粋） 人間看護学部 伊丹君和

「未来看護塾」の活動目的は、「地域のさまざまな人々が心も体も生き生きと健康な生活が送れるよう支援する」ということであり、これはSDGsの目標の1つである「すべての人に健康と福祉を」にも貢献しています。少子高齢社会の今、地域では皆さんが心と身体の健康について相談できる仲間を求めています。また、災害への対策をはかる必要もあり、地域のネットワークを拡大していくことが大切です。

「未来看護塾」は、彦根市内の病院や施設などで、入院患者さんや障がいをもつお子さん、まだ発達過程にある保育園児などを対象として、心と身体の健康、発達支援を行うなど、日々奮闘しています。ピバシティ彦根における「応援！生き生き健康生活」では卒業生たちの協力も得て、健康や防災などのイベントも行っています。また、今年度から新たに大学内で「県大にここ広場」を開催し、学生や教職員の血圧測定を行ったり、ハンドマッサージなどの提供を始めています。さらに、感染予防のための「衛生的な手洗い」の方法を指導するなど、学生や教職員、地域の皆さまにとって必要な健康教育も実施しています。

このようなさまざまな活動は、看護学生ならではの視点で地域課題の解決にもつながるとともに、自ら学ぶ力、それぞれの専門分野への興味・関心や知識・技術を高めるものであり、教育的な効果も大きいと考えています。また、悩み、試行錯誤を重ねながらボランティア活動を行う中で、実行力と豊かな感性も育てています。

DELIVERABLE 成果物／制作物



未来看護塾生の活動写真

活動パネル



キャンパス SDGs 用活動ポスター

16 たけともミライ



竹の会所と共に歩む！

宮城県気仙沼市に復興の拠点となる場所を作りたい。陶器研究室が中心となって始動したのが「竹の会所」プロジェクト。そこを拠点に地域と交流を続けてきました。「竹の会所」の解体を行い、活動記録を制作し、活動をとおして学んだことを後世に伝えていきます。

TEAM DATA

チーム名：たけともミライ
代表者：大橋あかり（環境科学研究科）
メンバー数：17名
指導教員：陶器浩一、山崎泰寛（環境科学部）
活動場所：宮城県気仙沼市
関係団体：株式会社高橋工業
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

(1) 竹の会所解体ワークショップ

★見出し写真：竹の会所の床の解体（09/10）

(2) 竹の会所閉所式



閉所式学生挨拶（09/15）

(3) ブックレット編集

(4) インタビュー



地域の人へのインタビュー（09/17）

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度は、活動拠点であった竹の会所を解体するという大きな節目の年であった。建設当初決められた仮設許可の期間から2度の延長があった。それは、地域の伝統である平磯虎舞の練習場所として必要とされていたからである。2017年に虎舞の練習場所が新しく別の場所にできたことで、竹の会所は一旦の大きな役割を終えた。そのあとも活動拠点として竹の会所でお祭りを年に2回行うことで、子どもたちや地域の方と笑顔に楽しく過ごす時間をつくることができた。今年は、竹の会所を解体することで、これまでの地域への感謝の気持ちを伝えたことが大きな成果である。今年も地域の方々と深い交流を続けることができた。

震災から9年が経ち、復興支援から始まったこの活動は、時間を経て状況が変わるにつれ今後どうしていくべきかという迷いの連続でもあった。その中で自分たちにできることを考えながら、地域の未来を地域の人と一緒に考えていくという目的で活動を続けてきた。竹の会所がなくなっても、その目的は変わらない。続けてきた活動を通してできた繋がりを大切に次活動につなげる。そのため的一步を踏み出すことができた。具体的には本づくりを通して、たけともミライの活動や震災について地域と一緒に振り返る。それによって地域の未来について意見し合う場をつくる。今年度のブックレットをつくるために行ってきた準備を元に一冊の本を作り上げる。そこで課題となるのが、たくさんの方の意見を聞きつつ、一つにまとめることの難しさである。進め方、決定する方法を計画していく必要がある。

活動を通して学んだこと (抜粋)

実際に竹の会所を見てみたいという想いで参加した。解体していく中でパネルの下の構造がどうなっているのか、どういう組み方で、結び方で、ということを見ることができた。竹林の中の竹はしなっているイメージで、その竹をうまく使うことでこんなに強くなるのかと驚いた。私にとって貴重な体験だった。

須藤つかさ (環境建築デザイン学科 1 回生)

たけともは学生間の関わりはもちろん地域との関わりが強い。解体しているときに地元の企業の方や近隣のみなさんが僕たちの活動に理解を示してくれていたのが印象的だった。閉所式では地域の人々や先生、竹の会所を建てた学生、守り続けた学生たちの当時の思いを聞くことができた。

寺本圭吾 (環境建築デザイン学科 2 回生)

竹でできた建築が 8 年も存在していたことがどれほどすごいことか、解体作業や実験の手伝いをして、竹の状態を見ることで実感することができた。割裂や腐食がひどく、構造材として機能していない材も多くあった。そのような材には比較的新しい竹が添えてあって、構造を担保していたり、補修の跡も見受けられた。色々な時間を経験した建築の姿を高い密度で見られたことは貴重な体験だった。もう一つ解体に関して感じたことは、竹の廃棄についてである。これまでのワークショップにおいて出た廃棄しなければならない竹が、大量に床下に溜まっていたため、その処理にかなりの労力を費やす事になった。これほど廃棄にコストがかかるとは、考えたことも無かった。これからは作るだけでなく、壊す工程まで想像してデザインしていきたい。

岩田慧 (環境建築デザイン学科 2 回生)

地域からのコメント

株式会社高橋工業 代表取締役 高橋和志さん

毎年変わらないたけともミライの活動について、地域として改めて感謝申し上げます。

「竹の会所」も 7 年半の仮設建築許可が満了し、3 月にデッキ床だけを残して上部構造が解体されました。それに伴い開催された展示会には多くの地域住民の他、たけとも OB・OG も集まって元気な顔を見せてくれました。展示された写真を見ていると色々なことが思い出されます。9 月にはデッキ床の解体撤去が予定され、竹の会所は閉所となります。これからのことは皆と話し合っただけでなければなりません、「竹の会所のモノとしての価値を新しい建築・場につなげてゆきたい。人と建築、人と人とのつながりが深まり豊かになっていき、” 終わりの時間 ” が ” 始まりの場 ” となることを願っている。」との学生の気持ちを嬉しく感じています。その一方で、継続すること自体が目的ではないので、自分たちに何ができるか、何を学ぶのかを共有して、これからの活動の原点にしてほしいと思います。

滋賀県立大学で建築を学ぶ学生だからできる活動を、地域として期待しています。

指導教員より

環境科学部 陶器浩一

「竹の会所」は 8 年間の役目を終え、学生たちの手で丁寧に解体された。建物は無くなっても、竹の会所の場所で起こったできごとは皆の心の中に生き続けてくれる。時間と空間を超えて、小さな絆はいつまでもつながりつづけることを期待している。

活動を通じて常に感じているのは「そっと寄り添う」ことの難しさである。人それぞれペースが違う。そういう方々どう向き合い、どう寄り添えばいいか。正解はないが、常に考えなければいけない問題である。この場所が、笑顔の集まる、未来に続く場所として、みなぎりの底から笑えるような地域づくりのお手伝いをしてゆきたいと考えている。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



竹の会所の解体材を使用したペン立て



竹の会所の歩み 展示会図録



竹の会所閉所式ポスター

17 フラワーエネルギー「なの・わり」



植物でエコな活動しませんか？

化石燃料に代わり、植物を育てるところからバイオディーゼル燃料の生産を始め、資源循環型社会のモデルづくりの活動を行っています。また科学実験教室や出前授業を開催し、子どもたちに科学の楽しさやエネルギーについて知ってもらう活動をしています。

TEAM DATA

チーム名：フラワーエネルギー「なの・わり」
代表者：稲垣徹（工学研究科）
メンバー数：19名
指導教員：山根浩二、河崎澄、出島一仁（工学部）
活動場所：彦根市
関係団体：菜の花プロジェクトネットワーク
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

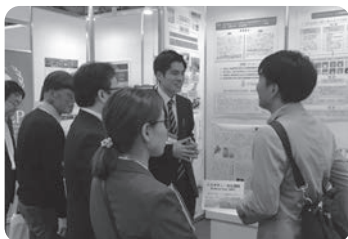
実施事業

- (1) 菜の花栽培
★見出し写真：看板作成（06/17）



唐箕かけ（08/17）

- (2) 高大連携授業
- (3) 天ぷら会
- (4) 湖風祭出店
- (5) 広報活動



びわ湖環境ビジネスメッセ（10/17）

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度の成果は「菜種の収量の増加」「油を生かしたイベントの実施」「新事業開拓」です。菜種栽培に関しては、昨年度から取り組んできた土づくりが実を結び、過去最高レベルの収量を記録しました。昨年度の問題点を引き継いで土づくりを適切に行えたことが収量増大の大きな要因ではないかと考えています。また天候に恵まれたこと、地域の方々とのやり取りがうまくいったことも要因ではないかと考えています。余談ですが、あまりにも多くの菜種ができたため、収穫作業は大変で、三津町の方々も喜ばしいことだが度が過ぎていると笑いながら嘆いておられました。来年度もなるべく多くの菜種を収穫できるよう手入れに力を入れていきます。

また天ぷら会、湖風祭出店、びわ湖環境ビジネスメッセ展示など、採れたなたね油を生かして私たちの活動を知ってもらう機会をたくさん作ることができたのは、良い成果だったのではないかと考えています。さらに、「なの・わり」のブログではたくさんのPV数を獲得し、私たちの活動を知ってもらうことができたこと、中地区公民館様からの新たな授業の依頼を受けられたことも非常に良かったと考えています。

課題はやはり「小学校出前授業」です。今年度も彦根市内の小学校にお願いしましたが、都合が合わず開催することができませんでした。原因として、小学校に依頼する時期が遅かったことがあげられます。小学校は年度初めに年間予定を決めてしまうため、年度途中に予定変更しづらいという事情があり、新年度に引継ぎをされてから連絡しているようでは遅いということに気づきました。改善策として早めに約束することや魅力的な授業内容を考え、来年度こそ小学生にもエネルギーや環境の学習をしてもらえるようにします。

活動を通して学んだこと

地域の方々と交流することで、農作業のことなど今まで自分が知らなかった知識をたくさん得ることができてよかった。草むしりを何回もしないといけなくて大変だったけど、しっかりと菜の花が育って油が作れたのでよかった。

井上大貴（機械システム工学科4回生）

作物を育てることの大変さを学んだ。草むしりや肥料まきはしんどかったが、その分、菜の花が無事に育ってくれたときの喜びは大きかった。また、湖風祭を始めとして、地域の人達と交流することができたのはとても良い経験になった。

畑中速人（機械システム工学科4回生）

エネルギー資源を得ることの大変さについて学ぶことができた。農作物のエネルギーを取り出すには、農業の知識から燃料に関する知識など多くの知恵や技術が必要であり、それらによって得られるエネルギーは小さいものであることを体感した。この体験から、エネルギーの大切さをより多くの人に知って貰いたいと感じた。

清山博規（機械システム工学科4回生）

他の人と一緒に作業することは楽しかった。また、地域の方々と談笑したりするのが楽しかった。湖風祭で出店したとき商品を買ってくださった方に活動について興味をもってもらった時は嬉しかった。草むしりを定期的に行ったが雑草が生え放題で全体には手が届かなかった。

速田佳祐（機械システム工学科4回生）

地域からのコメント

お借りしている畑の所有者 吉島利博さん

今の土地は元々当町の開発予定地で、平成15年に彦根市役所より県立大学環境科学部の松岡先生を紹介され、いろいろと検討指導を受けましたが、とりあえず学生さんにより菜種を栽培する事になり、菜種油の廃油をバイオディーゼル燃料に利用することになりました。途中で毎年交互に菜種とひまわりを栽培するようになり、名称を「なの・わり」として現在に至りました。その間、地元農家の二、三人の協力を得て、作付けすることになり、当初より、約15年余り地元協力者も変わらず今日に至っています。先般大学から距離が遠く不便で、作付けをやめたいと連絡があり、我々も年齢が80歳程になり、やめることも良かったのではないかと思います。長い間、学生さんも慣れない作業でしたがご苦労様でした。

指導教員より

工学部 山根浩二

今年度を振り返って、菜種油の収穫量がこれまでの先輩達の成果を超えたとのことで、これは畑を貸してくれている地元の方との協力によるものと思います。ただ、地元の方が高齢とのこともあり、借地での事業が来年度はできそうに無いことは残念です。来年度も「なの・わり」を続けるのであれば、事業全体の見直しが必要と思います。なお、「なの・わり」に対する“やらされ感”が学生間に存在しているようで、事業を行う意欲や意義が薄れているように感じます。卒業された先輩方の意思がうまく伝わっていない、あるいは先輩・後輩の関係が従来に比べて薄くなり、あまり互いに干渉しない世間の風潮が影響してきているためかもしれません。したがって、近江楽座「なの・わり」を廃止する、あるいは全く異なった楽座を、意欲を持った有志で立ち上げるなど、今後のあり方を検討いただきたい。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



なたね油



活動紹介ポスター

<その他成果物>

なのわりだより

18 とよさらだプロジェクト



ひと刈りいこうぜ！（野菜）

豊郷町の耕作放棄地で、地域の方にアドバイスをいただきながら野菜づくりを行っています。栽培した野菜で直販所、大学生協への販売、イベント出店を行い、地産地消の促進をめざしています。

TEAM DATA

チーム名：とよさらだ

代表者：齊藤文子（環境科学部）

メンバー数：19名

指導教員：鈴木一実、畑直樹（環境科学部）

活動場所：犬上郡豊郷町

関係団体：豊郷町役場

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

- (1) 農家さんの米作り
★見出し写真：田植え（04/28）
- (2) 豊郷町での野菜作り



畑作業（12/22）

- (3) 大学祭参加
- (4) 地元のイベント参加
- (5) 大学内外での野菜販売



学内での野菜販売（07/08）

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

昨年度行えなかった野菜販売を今年度は行えた点が、昨年度との大きな違いである。メンバーが昨年度より増えたわけではなく、早め早めに予定を打ち出し、スケジュールを組むことによって、作業人員を確保することができたのだと考えられる。また、地域の方の協力のもと、これまでほとんど行ってこなかった追肥、倉庫の修補を進め、畑全体の整備を進めることができた。しかし、活動日である土日に天候異常やメンバーの急用などがあるとその週の作業が行えないことがあったので、そういったリスクヘッジを考えることがこれからの課題に挙げられる。

今年度は地元の方や他団体の方たちからイベントにお誘いいただけただけ。「とよさらだプロジェクト」では地域交流も目的の一つであるため、地域の方や他団体の方たちと直接交流し、話を聞いたことはそういった方たちと普段かかわることがない学生にとってとても貴重な体験になったと思う。微力ではあるが地域活性化に貢献できただけでなく、実際に地元の現状を体感したことで、改めて「とよさらだプロジェクト」の活動目的を確認することができた。

来年度も引き続き野菜の栽培、地域のイベントへの参加を通じた地域交流などを行っていくとともに、野菜販売や他団体との交流を増やしていきたいと思う。また、SNSなどを使った「とよさらだプロジェクト」の活動についてのPRも積極的にしていきたいと思う。

活動を通して学んだこと (抜粋)

とよさらだの活動を通して、地域で活動する楽しさを知りました。これまで畑作業をしたことがなかったので、野菜作りの知識はありませんでしたが、先輩や地域の方が優しく教えて下さったり、地域のお祭りに参加する中で、野菜作りだけでなく、地域交流などの貴重な体験ができたと思います。

桶師慎平 (環境政策・計画学科1回生)

いくつもの貴重な体験をすることができた。一つは地域で活動する意味、必要性を体験できたところだ。田植えの手伝い、祭りに参加など普通のサークルではできない経験だと思う。二つ目は野菜を育てること。種類に応じた育て方がある。実際やってみなければわからないことがある。これから多くの種類を育てていきたい。

藤谷俊希 (生物資源管理学科1回生)

私がこのサークルを通して学んだことはいくつかある。まず野菜の育て方である。次に地域の人とのかかり方である。とても楽しく活動できたと思う。来年に向けて頑張ろうと思う。

小島晃利 (環境政策・計画学科1回生)

未来への挑戦、自然とのふれあい、人々との交流、とよさらだにはそれらがあふれている。自分達で野菜を育てることによって得られる新たな価値観、野菜への見方、またそれらに関わる人への尊敬、といった素晴らしい財産を豊郷の地域の人々とのふれあいを通して得ることができた。

早川将輝 (地域文化学科2回生)

地域からのコメント

豊郷町農家 市田豊さん

今いる学生が今年いっぱい頑張り、自分たちのやっている農業を理解して更にいろんな作物を作れるようにしてほしい。

今の若い人たちはあまり農業をやらないので、農業を広めるといことも目的として活動してほしい。地域(豊郷町)には農業をやっている人がいくらでもいるので、わからないことがあれば話を聞きにいくなりして活動をもっと活発に行ってほしい。

指導教員より

環境科学部 畑直樹

今年度の栽培方法や収穫量を詳しく記録し、来年度以降の参考資料として活用できるようにしてください。毎年継続的に栽培する作物を選定して、「とよさらだプロジェクト」の栽培技術を向上させることで、収穫物の生産性が更に高められるようにできるとよいと思います。それと併行して、様々な作物の栽培にもチャレンジしてみるのもよいですね。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



無農薬米宣伝チラシ



新入生勧誘ポスター

<その他成果物>

野菜

(タマネギ、トマト、ナス、ハクサイ等)

19 座・沖島



沖島でまなぶ、まじわる、ささえる

日本で唯一、湖に人が暮らす島、沖島。島民は漁業を生業に琵琶湖と共に暮らしてきましたが、過疎化などにより、暮らしの継承が危ぶまれます。このような状況に「学生も何かできるのでは?」と、「学ぶまじわる・支える」の3つを目標に島の振興のため活動しています。

TEAM DATA

チーム名：座・沖島
代表者：西陽来（環境科学部）
メンバー数：18名
指導教員：上田洋平（地域共生センター）
活動場所：学内、近江八幡市沖島町
関係団体：沖島町離島振興推進協議会、沖島自治会
近江楽座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

- (1) 島内の祭りのお手伝い
★見出し写真：春の大祭（05/03）



湖魚祭り（11/03）

- (2) 沖島小学校行事や地域の方のお手伝い



沖島小学校運動会（09/30）

- (3) 湖風祭出店
(4) ゴミ拾い
(5) 「しがのふるさと支え合いプロジェクト」
協定締結

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

本プロジェクトは発足してから4年目であり、今年度は活動人数の増加を目標に取り組んだ。活動人数を増やすために、個人個人に連絡したり、楽しい雰囲気作りを徹底した。また、4年目ということもあり、沖島の方々に認知されるメンバーが増えた。さらに、もっと深く島の運営に関わって欲しいという声上がるなど、信頼関係を築くことができたと考えられる。来年度はもっと期待の声に応えられるようにしていきたい。

今年度は、ゴミ拾いや協定締結式など、お祭りや行事以外にも沖島に携わることができた。この協定による補助金を用いて、山椒栽培を行おうと考えているので、今後は農業にも力を注ぎたいと思う。そして、今後もこのような自主的な活動を増やしていきたい。

本プロジェクトは島民との関わり無くしては成り立たない。メンバーがより沖島に溶け込み、島民と共に沖島の存続のために最善の道を模索できるようなチームを作っていきたい。

活動を通して学んだこと

沖島での活動は、自分がボランティア活動をしているという感覚ではなく、島民の方におもてなしを受けて楽しませてもらっているように感じます。そして、普段の生活場所では体験できないようなことが沢山できる島の魅力をもっと広めていきたいと思っています。

中村優日（生活栄養学科1回生）

座・沖島を通して地域について学ぶことができました。始めは、地域の大切さや重要さについて全く知りませんでした。しかし、沖島の人々に関わっていく中で、地域単位で活動していくことが大切で、それによって、地域に住む人達の暮らしが楽しく住みやすく温かい良い町になるのだなと思いました。

宮崎啓太（環境生態学科1回生）

地域からのコメント

コミュニティセンター職員 小川文字子さん

座・沖島の学生さん達が、春祭りや夏祭りなどにお手伝い頂くことで、高齢化が進んだ沖島の行事に活気が生まれていることを感じます。また、港付近の清掃を兼ねての新歓ハイクなどで、沖島に思い入れを持って下さる学生さんが増えていくのは嬉しい限りです。

指導教員より

地域共生センター 上田洋平

「飛び級」みたいな形で任されながらもリーダーたちはよくやっている。その調子で。学生諸君の活動とあわせて島出身の若い人たち、いわゆる「他出子」の皆さんの動向を注視しているが、昨年度から今年度にかけて祭りなど島の行事で「他出子」の皆さんの関与の度合いがやや増してきているように見える。これは先輩たちが「他出子」の皆さんともコミュニケーションをとり、働きかけを続けてきたことがジワリと効いてきているものと思う。期待であれライバル心であれ、あるいはある種のジェラシーであれ、学生諸君の存在や活動が地域の人びとの内にそれまで意識しなかった地域への感情をよびおこし行動を誘発している。学生には「触媒効果」があるといわれる所以である。そのように「触媒」として地域に変化をもたらしながら、いっばうで、学生諸君自身一人ひとりとはどのような内なる変化を経験しているか？ ただ「触媒」に甘んじていたいわけではあるまい？ リーダー同士の行き来があるようだし、チームの違いを超えて、そしてこの頃島に関わりのある他学の人にも呼び掛けて、そんなことも議論してみしてほしい。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物

20 内湖の再生と水辺コーディネート



内湖の生態系を守ろう

琵琶湖の内湖、彦根市内・神上沼や流入域である大学内の環境において、侵略的外来種を駆除するとともに魚類のモニタリング調査を行なっています。また駆除体験イベントや生き物観察会を開催し、人々が水辺に親しんでもらえるような活動も行なっています。

TEAM DATA

チーム名：滋賀県大生き物研究会
代表者：東和宏（環境科学部）
メンバー数：11名
指導教員：浦部美佐子（環境科学部）
活動場所：神上沼 他
関係団体：愛西土地改良区

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

(1) 神上沼における活動



調査で捕獲した魚 (05/18)

(2) 土地改良区生き物観察会

(3) 城陽小学校課外授業



水辺の生き物の観察・ふれあい体験 (05/26)

(4) 霞ヶ浦実習

★見出し写真：茨城大学広域水圏環境科学教育研究センターとの合同実習 (08/23)

(5) 湖風祭

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度も神上沼での定期活動を継続して行った。昨年度と同様、捕獲した外来魚の解剖は行わなかったが、代わりに魚粉を作り、それを県大ファームに提供した。このような他団体との協力活動は、互いの活動内容の認知や新たなメンバーとの交流などを生み、お互いにとって非常に有益なものであり今後もこの協力関係を継続していきたい。

今年度も昨年度と同様に、愛西土地改良区や湖風祭で生き物観察会を行い、城陽小学校の課外授業への協力、そして茨城大学との霞ヶ浦合同実習を行うことができた。こうしたイベントにより、地域の方々と交流し、水辺の環境に興味を持ってもらう機会を提供することができた。そして今年度は、神上沼での定期活動だけでなく、捕獲した外来魚を魚粉に加工し他団体に肥料として提供することができた。今後も水辺の生き物に興味を持ってもらうために、生き物観察にとどまらず、魅力あふれるイベントをどんどん企画していくとともに、そこで培われたノウハウを後世に引き継いでいきたい。

最後に、団体が発足してから今日に至るまで、滋賀県大生き物研究会の活動は地域の人々をはじめ、行政や組織の方々に支えられてきた。外来魚問題に取り組み、その情報発信をしている学生団体が減少している中、我々が活動できているのは駆除活動や啓発活動に関する理解と多くの支援をいただくことができたからである。そのような方々の期待に応えられるように、我々の活動理念である駆除・啓発・育成を3本柱とし、これからも活動を継続していく。

活動を通して学んだこと

研究会の活動に参加して初めて外来種の駆除を経験した。こうした環境活動に今まで取り組んだことがほとんどなかったことや自分の学びたいことに関係のあることから、活動に参加してよかったと思う。また、内湖だけでなく霞ヶ浦に行ったことも貴重な体験になった。

本谷匠（環境生態学科1回生）

琵琶湖は日本最大の湖であり、そのすぐそばで外来魚問題やその他の環境問題について学べることは非常に有意義だと感じた。今後は子どもたちに水辺の環境の重要性を伝えることで、次の世代を担う人材の教育に少しでも役立てたいと思った。

東和宏（環境生態学科3回生）

神上沼での定期活動も8年目に入り、これまでと同様今年も多くの外来種を駆除することができた。また、霞ヶ浦での活動も昨年同様開催できたので、これからも茨城大学との関係を維持していきたい。今後は駆除活動だけでなく子どもたちへの環境啓発活動も力を入れていきたい。

谷口雄哉（環境生態学科2回生）

継続的な駆除活動にもかかわらず神上沼での外来種の著しい減少が見られないことは、内湖内での再生産の可能性を表しており、引き続き駆除を行うとともに特に産卵期の駆除を行うことが必要だと感じた。また、他大学との交流の重要性も感じた。

巖島伸（環境生態学科3回生）

地域からのコメント 愛西土地改良区 魚住俊介さん

いつも「生き物観察会」の講師を快く引き受けてくださりありがとうございます。平成24年度より毎年、当改良区にて開催している農業体験活動『水土里ふれあい体験』の一端を担っていただき感謝しております。生き物観察会では、管内にある神上沼で固有魚等を事前に採取し、ミニ水族館としての展示や、大型固有魚等を用いた生き物クイズにより、参加者が実際に見て、触れて、知ることができる、子どもはもちろん、大人も楽しめる企画をされています。また、外来魚や外来植物への危惧についても写真や絵によりわかりやすく説明され、当日アンケートでも観察会は高い満足度となっております。参加者が次回を楽しみにされるイベントとなっております。

当改良区が仕事とする農業水利施設の維持管理は、農地や水を守るだけでなく、農村や水利環境を整え、そこに棲む生き物を護ることに繋がっております。今後も当改良区の取組に御協力を願うとともに、滋賀県大生き物研究会の皆様の一層のご活躍を応援しております。

指導教員より

環境科学部 浦部美佐子

今年度も県内および県外の団体とのコラボレーションを多く達成できたようで、大変充実した年度となったと思います。新メンバーの皆さんは過去の先輩たちの積み重ねてきた成果や周囲とのつながりをしっかり引き継ぎ、活動を展開させてほしいと思います。定期的なフィールド活動による地道なデータの蓄積、過去のデータのまとめと公表、イベントや他団体とのコラボに対して責任をもって関与すること、どれも大学での大切な学習の一環です。わからないことは地域の皆様や専門家の方々、先輩からしっかり学んで、どんどん吸収してってください。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物

21 JH1730 CONSERVATION PROJECT



建築遺産を生かした地域拠点づくり

歴史的建造物である Jesuit House を活かした地域博物館へと改修し、都市部の脆弱な地域コミュニティの新たな拠所として、地域の子どもの情操教育や地域活動、地域コミュニティが新たに生まれる場所にしていくための活動を行っています。

TEAM DATA

チーム名： Jesuit House Project
代表者： 枘岡健人（環境科学部）
メンバー数： 18名
指導教員： J.R. ヒメネス、ベルデホ（環境科学部）
活動場所： フィリピンセブ市 パリアン
関係団体： HO-TONG FOUNDATION、NPO法人セブンスピリット
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

- (1) 新しい展示スペースと中庭のデザインの提案



プレゼンテーションの様子（09/20）

- (2) クリスマスイベント
★見出し写真：地元の子供達との交流（12/13）
- (3) ハンドクラフトワークショップ



クラフトジュエリーの作成（01/20）

- (4) 近江楽座中間報告会での活動紹介

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度は、本プロジェクトの基礎となる敷地全体の改修計画・マスタープランの提案および博物館に隣接するギャラリーの新たなデザインの計画案の提案を行った。さらに、昨年度に引き続き、実際に Jesuit House を活用したクリスマスイベントを行い、地域住民や子ども達に開かれた場所として交流を深め、地域住民との距離が近づくような取組を行った。また、近江楽座のEプロジェクトとして、滋賀県立大学で行われたキャンパス SDGs に参加し出展、発表を行った。

敷地全体の改修計画・マスタープランの提案では、確定にまでは至らなかったものの、Jesuit House の将来像についてより踏み込んでディスカッションができた。改修後のイメージと活用についてお互いの考え方が共有されたことは成果であった。またギャラリーのデザイン案の検討では、2021年時点での実現に向けて具体的な提案にまで踏み込んだ話ができ、修正箇所が明確に示された。クリスマスイベントでは、昨年よりも多くの子ども達が参加し、滋賀県立大学の学生たちによるよさこいソーランの披露により日本の伝統的な文化を伝えることができ、充実したものとなった。さらに、日本の文化として折り紙を子どもたちと一緒に折った。自分たちで作ったものや、日本から予め作って持って行ったものも含め、子どもたちへのクリスマスプレゼントとしてあが当初の想定よりも更に踏み込んだ交流となったように思えた。

来年度は博物館リニューアル案とギャラリーのデザイン案を完成させ、実現に向けて確実にすすめていく必要がある。さらに、イベントについて、地域住民が参加するだけでなく、出店できるような仕組みやきっかけづくりを強化していくことが、今後、取組を地域に定着させるうえで重要であると考えられる。

活動を通して学んだこと (抜粋)

6月には、ベトナムや千葉の他大学との交流をしながらプロジェクトを進めることができた。ベトナム人とのグループワークも行ったため、コミュニケーションのための英語は重要だと学んだ。それ以上に、国を超えた文化や価値観の違いを大きく感じることができた活動であった。

神谷京佑 (環境建築デザイン学科4年生)

12月のワークショップに参加させてもらいました。現地の保育園や高校に行って、生徒の元気な姿を見て、自分も頑張ろうと思えることができました。一方、スラム街なども実際に見て、世界の国ごとの差がまだ大きいことを学びました。

栢岡健人 (環境建築デザイン学科4年生)

9月には Jesuit House 周辺の計画を初めて関わる東京とベトナムの学生と問題整理しながら考えられたことで、新たな視点から物事を見ることができました。現地の文化や情勢、言語を知ることを始め、そこに住む人たちと距離を近くして多様なコミュニティに関わり合うことの重要性を感じました。

芝田康平 (環境建築デザイン学科4年生)

9月のワークショップに参加させてもらいました。2回目の現地での活動だったのですが、スケジュールが詰まって色々な体験をし、新しい発見がありました。特に、スラム街の見学でフィリピン・セブの深いところを実際知ることができ、後輩にもいい刺激となったと思います。

松永三恵香 (環境建築デザイン学科4年生)

地域からのコメント

プロジェクトの協力者、UCHRR Inc. 財務担当 Earnest Calalang さん

そのプロジェクトのデザイン提案はセブでは非常にユニークなものでした。博物館と増築された必要な展示スペースは倉庫の中に配置されていました。大きな課題の一つとして、古い建物とその歴史を味わうことができなくなることが危惧されていました。私は、古い建物と提案された展示スペースの間にオープンスペースを導入するという学生のアイデアはすばらしいと思いました。その提案は、入館者により印象を与え、同時に博物館と街をつなぐことができると思っています。

指導教員より 環境科学部 J.R. ヒメネス・ベルデホ

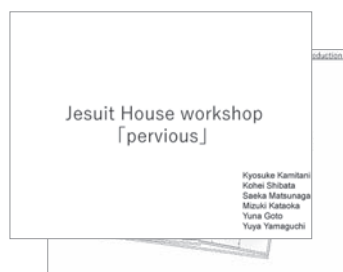
今年度は、パリアン地区を対象に3つのイベントが行われた。一つ目は、9月にパリアンのコミュニティと歴史遺産の関連についてのもので、日本やフィリピン、ベトナムの多くの学生が参加した。二つ目は、“没入”と名付けられたもので、学生たちがこの地区のより貧しい生活困窮者たちと強いつながりをもった。三つ目は、二つ目の結果を踏まえ、このような生活困窮者が住む地区の一つを支援するものだった。私は、今年、これらのイベントに参加したすべての国のすべての学生たちをととても誇りに思う。なぜなら君たちは、セブの最も貧しくて最も頼もしい地区に深く入り込んでおり、最も重要なデザインは、君たちを含め、これらの人々の心とともに始まるからだ。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



コミュニティスペース模型



改修計画案

<その他成果物>

水彩画

ハンドクラフトジュエリー

SDGs 学生大会用ポスター

22 ハティヤール村カディプロジェクト



糸つむぎから始まる自立支援型モデル

インド、ビハール州のブッタガヤ近郊に位置する貧困地区ハティヤール村において、近江八幡とインドに拠点を置きながら服を作る NIMAI-NITAI との共同によるフェアトレードを通じた村内の女性雇用と生活環境の向上を目指しています。

TEAM DATA

チーム名：カディプロジェクト

代表者：橋本光祐（環境科学研究所）

メンバー数：10名

指導教員：芦澤竜一、川井操（環境科学部）、横田尚美（人間文化学部）

活動場所：インドビハール州ブッタガヤハティヤール

関係団体：合同会社 NIMAI-NITAI

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018

PROJECT

実施事業

- (1) フェアトレード実演販売に向けた現地視察①（インド）

★見出し写真：カディ組合との打合せ（08/03）



カディ組合視察（08/03）

- (2) フェアトレード実演販売に向けた現地視察②（インド）



土壁モックアップ（12/12）

- (3) 写真撮影のレクチャー
- (4) 工房建設に使用する建材調査（インド）
- (5) 原寸モックアップによる構法検証（インド）
- (6) 茅葺職人との打合せ
- (7) 原寸モックアップによる構法検証（インド）

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度はフェアトレードの活動を行っていく上で必要な工房建設に関連した作業を中心に活動を行ってきた。まず、実際にカディ（手紡ぎ・手織りの布）が生産される過程の視察を行った。カディ組合ガヤ支店の視察では、紡がれた糸を布に仕立て、その布を販売している様子を伺うことができた。また、カディ組合が所有するカディ工房（Sujata Academy 内にある工房）にも訪れることもでき、現地の女性が働く姿や実際に工房が稼働している様子を視察することで、カディが生産から販売に至るまでの一連の工程を確認することができた。

次にカディ工房建設に関連した活動に関して、主に現地ですぐ可能な自然素材を用いた実寸のモックアップ（実寸大の試作）の制作を中心に行った。その中で、彼らの生活の知恵や日常的な技術（ロープワーク、藁葺き屋根の葺き方等）がカディ工房建設に応用可能な点、また、一方で現地の自然素材を用いた住宅には雨水に対する土壁や藁葺き屋根の耐久性があまり無いという点が調査、モックアップを通じて明らかになってきた。カディが手で紡がれていくように、カディ工房建設も現地住民が培ってきた手作業（生活の知恵や日常的な技術）をいかに取り入れていくかが重要であると感じた。

フェアトレードは「生産元開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す「貿易のしくみ」」とされている。本プロジェクトを申請した際には、工房建設後にフェアトレードを展開していくという計画であった。しかし、現地での調査やモックアップの制作を通じて、日本から技術指導を行う事で近代的な素材に頼らない自然素材を用いた生活の改善も期待できるのではないかと考えている。そういった意味では、建設後のフェアトレードではなく、設計や建設の段階からフェアトレードを行っているという意識が重要であると感じた。

活動を通して学んだこと

今年の活動としては、自然の MATERIAL と現地で手に入れられるものを用いてつくることにこだわった。模型でのスタディだけでなく、実際にモックアップしながら構造や構法、形を検討した。現在は実際に作った土壁を試験して、構造解析も行っている。構造解析の結果から再度、形を検討して完成を目指す。

村橋碧空（環境建築デザイン学科 3 回生）

調査や設計を通してハティヤール村の現状を知り、生活の厳しさを学んだ。その上でどのように現地でフェアトレードを展開していくべきか考えていく必要があると感じた。残念ながらインドへ行くことはできなかったが、土壁モックアップやワークショップを通して、建物への意識が向上した。

幸永幹真（環境科学研究科環境計画学専攻 1 回生）

今年度は、フェアトレードとして大きな活動を行う事はできなかったが、カディを作る現地の工場建設地の視察やカディ組合の方々と話をする事で来年度以降の学生の活動として、できることを考える大きなきっかけになりました。来年度は、フェアトレードとしての活動を大きな軸として頑張っていきたいです。

土器屋葉子（環境科学研究科環境計画学専攻 1 回生）

地域からのコメント（抜粋）

合同会社 NIMAI NITAI 廣中桃子さん

今年度、カディプロジェクトで建設した工房で、ハティヤール村の女性たちが製作したコットン糸でカディ布の完成までを目標としていたが、予定よりも現地調査が遅れ、2021 年 2 月に目標を再設定した。

橋本さんの長期滞在もあり、慎重にハティヤール村の人々と関係を築き、時間をかけ丁寧に土地および建材の調査を行った。現地では「自分ごと」として取り組んでくれている人が多いことは非常に評価できる。フェアトレードに関しては、韓国系の NGO が主宰する Sujata Academy を訪問し、カディの糸紡ぎ就労を希望する 6 名の女性が同行し、実際に指導してもらった。その結果、全ての女性が、スムーズに作業できることがわかり、ハティヤール村で実現できるという確信を得ることができた。工房建設後には、ハティヤール村のカディ工房でできた糸が、生地となり、フェアトレード商品を制作できる可能性は確実と考える。

指導教員より

環境科学部 川井操

カディプロジェクトでは、現在、カディ工房建設に向けて準備を進めている。昨年は、私自身も 5 月と 8 月に 2 度の現地視察をおこなった。現地の気候は 4 月から 9 月までの期間、気温が 40 度近くまで上がり、雨季も含めて建設工事ができない状況である。こうした過酷な環境に加えて、現地で集めることのできる材料は限られていること、何よりできる限りハティヤール村の人々の生活を損なわないように、近代的な材料を用いずに、土、竹、茅葺の現地で使われる材料・法を採用することを試みている。また、敷地の中心にある祈りの象徴とされる菩提樹に向かうように女性たちの作業空間を設けている。また村の子ども達が遊び回り、老人たちが休めるように、菩提樹の周りに余白を設けて、木の下と軒先での快適な空間を考慮している。インドの辺境地での設計施工は、想像を超えたトラブルが起きるのだが、代表の橋本くんは長期間の滞在で現地住民の信頼を得ており、日々たくましく成長しながら活動する姿勢に敬意を表したい。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物

03 とよさと快蔵プロジェクト

とよさと快蔵プロジェクト活動報告新聞

2020年3月31日発行

-プロジェクト紹介-

とよさと快蔵プロジェクトとはどんなプロジェクト?

とよさと快蔵プロジェクトは、豊前市の焼酎産地活用を目的として「NPO法人とよさとまほろび快蔵」を設立し、豊前市にも快蔵文化を普及させることを目指しています。快蔵文化の普及を通して、地域活性化を図りたいと考えています。

豊前県立大学の環境デザイン学科の学生有志が平成18年に結成し、今年で18周年を迎えました。前身は10名もいなかったサークル、今では100名を超える団体となりました。快蔵文化の普及を目的として活動してきたが、最近では快蔵した物を持ち寄りや活用、楽しむのが、その活動方法のひとつとなったイベント「快蔵・Bar」の開催など、多岐にわたる活動もこなしています。



ちよっさきていよ! プロジェクト自慢

100人超えのプロジェクトメンバー

今年度プロジェクトメンバーが約120人となり、より一層盛り上がりを見せています。

環境デザイン学科	95名
生活デザイン学科	23名
環境政策科	2名
国際コミュニケーション学科	1名
電子システム工務科	2名

チームのビッグニュース

久保川部リノベーション「小人と暮らす家」



豊前市立野津に設置している一般の事業所。この物件は築30年近く経った古い建物であるため、築前1階の1層住宅に改修する事業であった。「小人と暮らす家」は、この物件をリノベーションし、いかに子どもと大人が楽しく暮らせるかをテーマに、子どもと大人が楽しく暮らせる空間づくりに取り組む。子育て世代のみなさんと、子育て支援の活動も行う。

1年間の活動を通じた成果と課題

この1年間の活動を通して、豊前市にも快蔵文化を普及させることに貢献することができた。また、快蔵文化の普及を通して、地域活性化を図りたいと考えています。また、快蔵文化の普及を通して、地域活性化を図りたいと考えています。

地域の声

北川 豊彦さん (NPO法人とよさとまほろび快蔵代表)

今年、とよさと快蔵プロジェクトは、大規模な一軒家の物件を3人部屋に改修し出すという計画で活動してきました。快蔵文化の普及を通して、地域活性化を図りたいと考えています。また、快蔵文化の普及を通して、地域活性化を図りたいと考えています。

04 子ども学習支援サポーターズ

2020年3月31日発行

子ども学習支援サポーターズ発行

第2号

学サポ新聞

子ども学習支援サポーターズとは... 彦根市内や愛荘町にて子どもの学習支援と居場所づくりのボランティア活動を行う学生の集まりです。現在、12名のメンバーで活動中!

楽しい食事を子ども達に!

「いただきます!」食事に集まった人達の明るい声があふれる。2019年4月から8月頃まで木曜日の活動場所である、プライトラスの食事を学サポメンバーが担当した。毎週食材を買い、活動場所の調理室を借りて食事を作った。子ども達に楽しんで食事をしてほしいと、好き嫌いを合わせた調理をし、メニューも毎回変えるようにした。季節を感じるようにと、夏頃には夏野菜カレーを作った。どんな美味しい味を入れたのか当てるミニゲームをするなど、食べる以外でも楽しめるように工夫した。調理を手の空いているサポーターが手伝ってくれたこともあり、サポーター同士の交流を深める場にもなった。



地域のお祭り子ども達と一緒に模擬店

2019年10月6日、20日に地域のお祭り(平田町ウィズフェスティバル、大宮町中地区文化祭)にて、昔風の活動で関わる子ども達、地域・学生サポーターが一緒に、たまごサンドやミニピザを調理し、販売した。子どもとサポーターがアイデアを出し合い、お店をきりもりし、休憩時間ほかの模擬店を見て回り、催し物を楽しんだ。一生懸命にお店をしたり、お客さんの笑顔にうれしそうに微笑む子どもたちの一面を見ることができた。



成果と課題

多くの新メンバーが加わり、学習支援活動と、季節に合わせたイベントを行うことができた。今年も新メンバーを加えて、昨年度の振り返りをして活動していきたい。



地域の声

NPO法人 Links の代表の栗田雅美です。子どもサポーターズのみならず、今年1年も共に活動をしてきてありがとう。心から感謝しています。私たち NPO 法人 Links は、この一年も学びやLL 教室、ひとり暮らしの子ども支援活動、責任ある学習支援教室、かめの子どもの居場所活動を行ってまいりましたが、みなさんの存在がなくては活動が成り立たなかった。この活動は、NPO 法人 Links の活動ができたことと思います。NPO 法人 Links の活動は子どもたちにも大人気ですが、子どもサポーターズでした。卒業して子どもたちや大学生を送り出す「卒業お祝い会」は、コロナウイルス感染症の影響で実施できなかったことが大いに残念なことです。今年(2019年度)は4月に多くのメンバーが加入されたこともあり、定例の一年になったのではないでしょう。2020年度も引き続き、たくさんの方々が参加や支援の活動に力を発揮していただけることを期待を寄せています。これからもよろしく働きます。NPO 法人 Links 代表 栗田雅美

05 廃棄物バスターズ

発行日 令和2年3月16日

廃棄物バスターズ新聞

令和元年度活動報告号

「雨水タンク」

本団体は、雨水タンクを普及させることを目的として活動しています。雨水タンクは、雨水を貯めて利用する装置で、節水や環境保護に貢献します。今年度は、雨水タンクの普及を目的として、様々な活動を行いました。また、雨水タンクの普及を通して、地域活性化を図りたいと考えています。

雨水タンク製品化を目標として

今年度は、雨水タンクの普及を目的として、様々な活動を行いました。また、雨水タンクの普及を通して、地域活性化を図りたいと考えています。

「地域の声」

地域のみなさん、こんにちは。廃棄物バスターズの活動を通じて、地域活性化を図りたいと考えています。また、廃棄物バスターズの活動を通じて、地域活性化を図りたいと考えています。

「地域の声」

地域のみなさん、こんにちは。廃棄物バスターズの活動を通じて、地域活性化を図りたいと考えています。また、廃棄物バスターズの活動を通じて、地域活性化を図りたいと考えています。

「地域の声」

地域のみなさん、こんにちは。廃棄物バスターズの活動を通じて、地域活性化を図りたいと考えています。また、廃棄物バスターズの活動を通じて、地域活性化を図りたいと考えています。

06 かみおかべ古民家活用計画

2020年3月31日

かみおかべ古民家活用計画

Sleeping Beauty

「留学生いらいしい」

留学生の増加に伴い、留学生の受け入れ体制を整えることが重要である。かみおかべ古民家を活用し、留学生の受け入れ体制を整えることが重要である。かみおかべ古民家を活用し、留学生の受け入れ体制を整えることが重要である。

「地域の声」

地域のみなさん、こんにちは。かみおかべ古民家活用計画を通じて、地域活性化を図りたいと考えています。また、かみおかべ古民家活用計画を通じて、地域活性化を図りたいと考えています。

「地域の声」

地域のみなさん、こんにちは。かみおかべ古民家活用計画を通じて、地域活性化を図りたいと考えています。また、かみおかべ古民家活用計画を通じて、地域活性化を図りたいと考えています。

「地域の声」

地域のみなさん、こんにちは。かみおかべ古民家活用計画を通じて、地域活性化を図りたいと考えています。また、かみおかべ古民家活用計画を通じて、地域活性化を図りたいと考えています。

07 田の浦ファンクラブ 学生サポートチーム

田の浦まちづくりプロジェクト 田の浦の学生サポートチーム

ヒックニコース



昨年度も私たち田の浦ファンクラブ学生サポートチームが中心となって運営を行う「海の大」として「田の浦」が開催されました。

漁をしながら海の手入れ、海の資源だけでなく子どもたちが「おれいちゃん・おばあちゃん」

田の浦ファンクラブ紹介

田の浦ファンクラブは、東日本震災の被災者支援を目的に設立された団体です。今年度は宮城県巻子町町歌津の浦地区の方々を協力をしながら、様々なまちづくり活動を行っています。例えば海の活動や、交流会、クリスマス会、キャンプなどがあります。

成果と課題

昨年度は新しいメンバーが一人も入ったこともあり、潮風祭への出店や防災イベントの企画・参加など、様々な活動ができました。

今年度ももうとっとうちの活動を続けていくために、SNSや動画配信サイトの積極活用により力を入れていきます。

2020.3.11. TANO URA



08 タクロバン復興支援プロジェクト



タクロバン復興支援プロジェクト

2018年12月にタイのアムステルダムにある海外協力隊員やボランティアの協力のもと、タイのタクロバン県にボランティアを派遣し、復興支援プロジェクトを実施しました。

義食業コミュニティベースの組織

現地の社会情勢やニーズを把握し、現地の人々と協力して復興支援プロジェクトを実施しました。

建築物の完成、現地の人とイベント

復興支援プロジェクトの一環として、現地の人々とイベントを実施しました。

自販ファンフォン義食業コミュニティベースの組織

現地の人々と協力して復興支援プロジェクトを実施しました。

09 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト

ボランティアサークル Harmony 新聞 (Harmony's News paper)

2019年6月23日発行

①サークルのラジニュース



②たつの市に「つりろくろく」を贈る



③地域の風



10 BAMBOO HOUSE PROJECT

BAMBOO HOUSE PROJECT



2019年12月にタイのアムステルダムにある海外協力隊員やボランティアの協力のもと、タイのタクロバン県にボランティアを派遣し、復興支援プロジェクトを実施しました。

現地の人々と協力して復興支援プロジェクトを実施しました。

復興支援プロジェクトの一環として、現地の人々とイベントを実施しました。

11 Taga-Town-Project

Taga-Town-Project
2020年3月31日

年間スケジュール

「星空観察会」開催

YOBISHI プロジェクト

写真ワークショップ・写真展

成果と課題

地域の声

12 おとくらプロジェクト

おとくら新聞
発行日 2020年3月31日

おとくら10周年記念号

①10周年記念メニューコンペ(10)

②10周年記念コンサート・バーチャル(9/22)

③おとくら10周年記念写真展(10/1月)

④おとくら10周年記念画子の作成

⑤おとくら10周年記念画子の発表(13-16)

おとくらプロジェクトってなあに?

成果と課題

地域の声

ちょっと聞いてよ!おとくら作!

13 政所茶レン茶〜

政所茶新聞

政所茶のPR活動

イナズマロックフェス出店

1年間の畑作業と苦勞

新商品の開発

地域の声

活動成果と課題

14 木興プロジェクト

木興プロジェクト

木づくり

田の浦

田の防風

サマースクール

大森の集落

発行日 2020年3月31日

活動報告新聞

ビッグニュース

「未来看護塾」の活動報告。看護学生が地域で活躍する様子や、オンライン授業の取り組みなどが紹介されている。

プロジェクト紹介

看護学生が地域で活躍する様子や、オンライン授業の取り組みなどが紹介されている。

地域の声

地域の方々の声や、看護学生が活躍している様子などが紹介されている。

活動目標

看護学生が地域で活躍する様子や、オンライン授業の取り組みなどが紹介されている。

一年間の成果と課題

看護学生が地域で活躍する様子や、オンライン授業の取り組みなどが紹介されている。

2020年(令和2年) 3月31日(火) 発行

竹の会所 完全解体

感謝と祈りを込めて学生が丁寧に解体

閉所式

2020年3月31日 発行
編集:中野 尚志
発行所:たけともミライ

初心に帰ったテント生活

学生がテント生活を送る様子や、活動の意義などが紹介されている。

毎日地球未来賞 奨励賞受賞

学生が地球未来賞を受賞した様子や、活動の意義などが紹介されている。

発行日 2020年3月31日

フラワーエネルギー「なの・わり」

なたねの収穫量過去最大

「なの・わり」の活動報告。なたねの収穫や、バイオ燃料の取り組みなどが紹介されている。

プロジェクト紹介

なたねの収穫や、バイオ燃料の取り組みなどが紹介されている。

地域の声

地域の方々の声や、活動の意義などが紹介されている。

天ぷら会大好評

学生が天ぷら会を開催した様子や、活動の意義などが紹介されている。

成果と課題

学生が天ぷら会を開催した様子や、活動の意義などが紹介されている。

発行日 2020年3月31日

とよさらだプロジェクト

本格スープカ

学生が本格スープカを開発した様子や、活動の意義などが紹介されている。

学内販売

学生が学内販売を行った様子や、活動の意義などが紹介されている。

田植え!!

学生が田植えを行った様子や、活動の意義などが紹介されている。

地域の声

地域の方々の声や、活動の意義などが紹介されている。


活動の振り返り

学生が活動の振り返りをした様子や、活動の意義などが紹介されている。

19 座・沖島

座・沖島新聞

Vol.04 2020.3.31



座・沖島とは

本プロジェクトが「まじわろ」を目標に活動している。主に、島民にどんな活動してほしいか、私たちが協力できることがあるかをアフレコして、沖島に貢献した活動を目標としている。お祭りや小学校行事などのお祭りや、座・沖島が主眼点とならなかった卒業式などの活動を通して、メンバーが沖島について理解を深め、沖島の活性化の方法を提案していきたい。

沖島に住みたい

昨年夏に行われた座・沖島は、今年度も引き続き行われる。沖島の風景に打ち惚れるもの多岐にわたる理由を踏まえ、活動を通して、座・沖島を島民の知るところにしたいという目的があった。これは活動の目的であり、継続して定期的に行っていくことになる。

発見4年を振り返る

前年度は発見して4年ということで、役割分担力をいれた。広報や制作などの経験が、イベントの企画や実施の面で、様々なスキルを身につけた経験が多岐にわたる。そこで、お祭りや座・沖島などの活動で、様々なスキルを身につけた経験が多岐にわたる。そこで、お祭りや座・沖島などの活動で、様々なスキルを身につけた経験が多岐にわたる。

今年度のスケジュール

- 4月 開会式
- 7月 沖島小学校運動会
- 8月 沖島夏祭り
- 9月 沖島小学校運動会
- 11月「座・沖島」出版
- 12月 閉会式
- 1月 発表会
- 2月 閉会式
- 3月 島民の方と話し合い

(協定による順位の扱いあり)

沖島のお祭りのお手伝い

今年度も島の祭りに参加し、活動を通して島の文化や風景を知りつつ、沖島の島民の方とこれからも交流を深めていきたい。

沖島住民の声

座・沖島の学生さん達が、島の文化や風景の魅力を伝えてくださることで、島民の方々の活動の機会が増え、島の活性化につながっていく。また、学生さん達の活動を通して、島の文化や風景を知りつつ、沖島の島民の方とこれからも交流を深めていきたい。

20 内湖の再生と地域の水辺コーディネート

近江楽座 滋賀県大 生き物研究会

発行日：2020年3月31日

チームのビッグニュース

2019年夏に行った茨城県霞ヶ浦実習に「外来魚「チャネルキョウトフィッシュ」を釣り上げた。サイズは7cmの物であり、各所で実習を行った茨城大学広域水圏環境科学教育研究センター内の記録48cmには及ばなかったものの、今期1番の大きさであった。このような巨大な外来魚が琵琶湖へ水害で運ばれないよう、今後も活動を続けていきたいと思う。



生き物研究会 近江楽座

プロジェクト紹介

駆除活動：在来魚の豊富な内湖の復活!
内湖(神上沼)に生息する外来魚(オオクチバス、ブルーギル)を投網で捕獲・駆除し、同時に在来魚の調査をしている。持ち帰った外来魚から魚粉を生成し、肥料として再利用している。

啓発活動：地域の水辺に関心を促す
地域の子どもたちと交流し、身近な水辺やそこに住む生きものに興味を持ってもらうことで、子どもたちに将来の水辺を担う存在になってもらうべく活動している。




↑投網をする様子 ↑捕獲したオオクチバス

プロジェクト自慢

生き物が好きな子どもも、苦手な子どもも・・・みんなが笑顔で続け合ってくれます!



↑子どもたちと交流する様子

地域の方の声

「この活動を通して、地域の子どもたちが水辺に関心をもち、生き物に興味を持ってもらうことができています。また、子どもたちが水辺を担う存在になってもらうことができています。」

1年の成果と課題

今年も神上沼での定期活動で捕獲した外来魚を魚粉にし多団体に提供するという新たな試みに成功した。今後は駆除活動に加えて地域との交流にもより力を入れていきたいと思う。

21 JH1730 CONSERVATION PROJECT

Jesuit House プロジェクト

発行日 2020年3月21日

プロジェクト紹介

Jesuit Houseは、日本の伝統的な建築様式である「和風建築」をテーマにしたプロジェクトです。このプロジェクトは、日本の伝統的な建築様式である「和風建築」をテーマにしたプロジェクトです。このプロジェクトは、日本の伝統的な建築様式である「和風建築」をテーマにしたプロジェクトです。

活動内容

1. 遺構修復計画ワークショップ (2019.8.14-19.20)
2. SITTO PANTIN 復興計画
3. コミュニティ復興ワークショップ (2019.12.13-19.20)
4. クラフトジュエリーワークショップ
5. 情報発信




22 ハティヤール村カディプロジェクト

ハティヤール村カディプロジェクト

発行日 2020年3月21日

ハティヤール村カディプロジェクトについて

ハティヤール村カディプロジェクトは、地域の活性化を目的としたプロジェクトです。このプロジェクトは、地域の活性化を目的としたプロジェクトです。このプロジェクトは、地域の活性化を目的としたプロジェクトです。

プロジェクトの背景と目的

ハティヤール村カディプロジェクトは、地域の活性化を目的としたプロジェクトです。このプロジェクトは、地域の活性化を目的としたプロジェクトです。このプロジェクトは、地域の活性化を目的としたプロジェクトです。

プロジェクトの進捗

ハティヤール村カディプロジェクトは、地域の活性化を目的としたプロジェクトです。このプロジェクトは、地域の活性化を目的としたプロジェクトです。このプロジェクトは、地域の活性化を目的としたプロジェクトです。

地域の方の声

「このプロジェクトを通して、地域の活性化が実現できると期待しています。また、子どもたちが水辺を担う存在になってもらうことができています。」

1年の成果と課題

今年もハティヤール村カディプロジェクトの活動を通じて、地域の活性化が実現できたと期待しています。また、子どもたちが水辺を担う存在になってもらうことができています。

3 共通プログラムの報告

3-1 活動の安全確保のためのスキルアップ講座

2019年危険スキルアップ講座

危機対応講習

活動にはあらゆるシーンで様々な危険が潜んでいます。近江楽座ではより安全に地域活動を行うため、専門家を招いて危機対応講習(全2回)を開催！本学学生ならどなたでも参加歓迎です！

第1回 7/19(金) 16:30-18:30
ボランティア活動における実践的安全管理について

日常生活をはじめボランティア活動時にも様々なリスクがあります。安全管理の基本はリスクを知ることです。知ることで予測が生まれ、予測から対応が生まれます。この一連の流れをグループワーク等を通して実践的な安全管理について学んでいきます。

講師 深山 恭介さん
 NPO法人国際ボランティア学生協会(IVUSA)

大学卒業後、日本の各地のボランティアでさまざまな現場で、地域社会の課題として本職経験。上は札幌市道庁支庁や中山府知事官舎支庁支庁支庁、2013年現在まで5年以上にわたる。現在はNPO法人国際ボランティア学生協会の代表理事として、近江楽座事業をはじめとする各種事業、各種研修の企画・実施、運営を担っています。

対象：近江楽座学生および本学学生(50名程度)
 場所：滋賀県立大学 湖風会館(A7棟)会議室・談話室

第2回 7/25(木) 12:15-13:00
交通事故防止について

自動車事故防止と自転車の安全利用等についてお話していただきます。

講師 福永 恵さん 彦根警察署 交通課 課長補佐

対象：近江楽座学生および本学学生(50名程度)
 場所：滋賀県立大学 共通講義棟 A4-302

お問い合わせ・申し込み
 事前予約を下記連絡先までお願いします。
 当日参加も受付けています。
 近江楽座事務局(担当：前川)
 TEL:0749-28-8616(内線:8616)
 E-mail:info@ohairakuza.net

「近江楽座」
 OHARA RAKUZA

近江楽座における地域活動をより安全に行うために、実践的安全管理の進め方と、活動にともなうリスクの多い交通事故の防止について、専門家を招いて連続講座を開催しました。

Ⅰ 第一回 ボランティア活動における実践的安全管理について

日時：2019年7月19日(金) 16:30～18:30
 会場：湖風会館(A7棟) 会議室・談話室
 講師：NPO 法人国際ボランティア学生協会 (IVUSA)
 事業部 深山恭介さん

〈当日の流れ〉

1. IVUSA について
2. リスクヘッジについて
3. 危険予測活動について
4. 安全管理チェックシートの作成

NPO 法人国際ボランティア協会(以下、IVUSA)の深山恭介さんを講師に迎え、「ボランティア活動における実践的安全管理について」お話いただきました。

1. IVUSA について

はじめに IVUSA の活動についてお話いただきました。IVUSA の活動分野は「国際協力」「災害救援」「環境保護」「地域活性化」「子どもの教育支援」の5つがあり、同じように活動を行っている学生の活躍を知ることで活動の参考、励みになったことと思います。

2. リスクヘッジについて

リスクを知ることによって予測が生まれ、対応することができるということを、グループワークを行いながら学びました。



グループワークの様子



グループで考えた行動目標を発表

「リスクヘッジについて無意識に行っていることもあったが、意識して考えたことはなかったので良い時間になった。」「リスクヘッジの重要性を実感した。」という感想がありました。

3. 危険予測活動について

近江楽座チームが活動している時の写真を使って危険予測活動を行いました。写真の中にどんな危険が潜んでいるのかを書き出し、危険のポイントを抜き出します。そこから具体的な対策を考え、チームの行動目標を決めていきます。

4. 安全管理チェックシートの作成

ハインリッヒの法則を説明いただき、過去の自分たちのヒヤリ・ハットを共有し、過去の自分にアドバイスをする形で安全管理チェックシートを作成しました。

学生の感想には「プロジェクトを行う上で重要なことが知れて、今後の活動の改善につながりそう」「とても勉強になった。特にみんなで考えて、共有することが大事であることをしっかり学びました」「これからは意識してリスクヘッジに取りくんでいこうと思う」といった、今回の講習をこれからの活動に生かしていくという声が多く見られました。

ぜひ実際の活動の中で、今回の講習の内容を実践して行ってください。



会場の様子

Ⅱ 第二回 交通事故防止について

日時：2019年7月25日(木) 12:15～13:00

会場：講義室 A4-302

講師：彦根警察署 交通課巡査部長 福永恵さん

彦根警察署交通課巡査部長の福永恵さんを講師に迎え、「交通事故防止について」についてお話いただきました。

前半は実際にあった事故の話を変え、分かりやすく自転車・自動車の事故について説明くださいました。普段自転車で通学している学生は「自転車で起こした事故での賠償金の高さに驚いた」「何気なく乗っている自転車も人の命を奪いかねないことを改めて認識できた」と自転車でも加害者になりうることや交通事故の恐ろしさを感じる事ができたようです。

後半は自動車の運転に関する映像を見ました。スマートフォンのながら運転が取り上げられており、運転中にはスマートフォンを時々見るだけでもとても危険なことがよく分かりました。

学生からは「改めて自動車でスマホは使用しないでおこうと思った」「運転するからには責任を持ち、周囲の状況に気を配るのが免許を持つことだと思った」という感想があり、改めて安全運転について気を引き締める機会となりました。



福永さんから交通事故についてお話しいただく



日 時：2019年11月16日(土) 9:30-17:30
 会 場：滋賀県立大学
 主 催：滋賀県立大学、滋賀県
 共 催：彦根長浜地域連携協議会、一般社団法人
 人環びわ湖・地域コンソーシアム

県内外の学生等が、SDGsの達成に関連する
 各自の活動を持ち寄って情報発信や情報交換を行
 い、交流を深めるとともに、新たなネットワークを
 構築することを目的に開催し、計412名の参加が
 ありました。

| プログラムと内容

1. オープニング 開会式 (9:30-10:10)

2. 基調講演 (10:10-10:55)

高野翔さん(国際協力機構(JICA)職員)
 「SDGsをアクションしよう!」

3. パネルディスカッション (11:00-12:00)

パネリストの5名から活動報告をいただきました。
 それぞれの課題を提示いただき、解決方法や
 協働の方法について議論を行いました。田の浦ファン
 クラブ学生サポートチームから川嶋凜海さんが
 パネリストとして参加しました。

4. ポスターセッション・動画コンテスト (12:45-14:15)

27チームに参加いただき、近江楽座からは有
 志の5チームが参加しました。

5. ワークショップ・成果発表 (14:30-17:30)

参加者が17グループに分かれ、グループディス
 カッションを行い、出しあったアイデアをまとめ、成
 果を発表しました。

6. 交流会 (17:40-19:00)

| ワークショップテーマと報告団体

(1) 海外支援

- 近江楽座「タクロバン復興支援プロジェクト」
- 近江楽座「Jesuit House Project」
- 近江楽座「ハティヤール村カディプロジェクト」

(2) 自然エネルギー

- 近江楽座「フラワーエネルギー『なの・わり』」
- 小出宏之氏(イビデンエンジニアリング(株))
- 藤敦正幸氏(伊吹山集落営電)

(3) 古民家再生

- 近江楽座「とよさと快蔵プロジェクト」
- 近江楽座「かみおかべ古民家活用計画」
- NPO ツナガルドボク中国(鳥取大学)

(4) 復興・防災まちづくり

- 近江楽座「田の浦ファンクラブ学生サポート
 チーム」

- 近江楽座「たけともミライ」
- 近江楽座「木興プロジェクト」
- 防災のつどひ(和歌山大学)
- 防災サークル轍(名古屋大学)
- (5) 地域診断法
 - 多賀町立大滝小学校
 - 木村恵理氏(野洲市社会福祉協議会)
 - 李宗蒙氏(滋賀県立大学)
- (6) 地域文化を未来につなぐ
 - 近江楽座「座・沖島」
 - 近江楽座「スチューデント・キュレイターズ」
 - 藤田アニコー氏(滋賀でESDを進める会)
 - 竜王みやび氏(山内エコクラブ・学生団体 TREAD)
- (7) エシカル消費とフェアトレード
 - (株)コクヨ工業滋賀
 - 叶匠壽庵
- (8) 農業と地域ブランド
 - 近江楽座「政所茶レン茶ター」
 - 近江楽座「とよさらだプロジェクト」
 - 今堀治夫氏(東近江市栗見出在家町魚のゆりかご水田協議会)
 - 上田長司氏(農業生産法人(有)永源寺マルベリー)
- (9) 琵琶湖の環境
 - 近江楽座「廃棄物バスターズ」
 - 近江楽座「滋賀県大生き物研究会」
 - 酒井明久氏(滋賀県水産試験場)
 - 草津中学校(渋川小学校卒業生)
- (10) やまの健康
 - 近江楽座「BAMBOO HOUSE PROJECT」
 - 伊賀並正信氏(木の駅いぶき実行委員会)
 - 田中孝佳(滋賀県琵琶湖環境部森林政策課)
- (11)SDGs を広める
 - 芝浦工業大学 SDGs 学生委員会
 - 近江楽座「あかりんちゅ」
 - 中野優氏((株)ライフデザイン阪急阪神)
 - 西野日菜氏(立命館大学 Sustainable Week 実行委員会)
- (12) 科学技術と SDGs
 - 青柳孝幸氏(PRO-SEED(株))
 - 丸直樹氏(ガイザーロボットスクール)
 - 西村健太郎氏((有)エコラボ)
- (13) 健康と福祉を考える
 - 近江楽座「未来看護塾」
 - 近江楽座「ボランティアサークル Harmony」
 - 高屋大樹氏(滋賀県健康医療福祉部健康寿命推進課健康しが企画室)
- (14) 教育と SDGs
 - 近江楽座「子ども学習支援サポーターズ」
 - 堀豊氏(フードバンクびわ湖)
 - 藤澤彰裕氏(東近江市 BBS 会)
- (15) 多文化共生と地域社会
 - 會田真由美氏((公財)滋賀県国際協会)
 - 聖泉大学留学生防災チーム
 - 河かおる氏(滋賀県立大学)
- (16) コミュニティ再生・持続可能なまちづくり
 - 近江楽座「おとくらプロジェクト」
 - 近江楽座「Taga-Town-Project」
 - DOKKO(福知山公立大学)
 - 丸山真央氏(滋賀県立大学)
- (17)SDGs カードゲーム体験

| 当日の様子



パネルディスカッションで活動報告
(田の浦ファンクラブ学生サポートチーム)



ワークショップ参加者のそれぞれのアイデアを共有



ポスターセッション・動画コンテストの様子



ワークショップの成果を発表



ワークショップでの活動発表 (あかりんちゅ)



交流会の様子

4 学生有志活動

4-1 近江楽座 合同説明会「楽座市」

新入生を応援する活動!!

入退場自由!!

近江楽座「は学生主体の地域活動を展開する取り組みです。学年や学部を越えての協働活動が中心です。」

近江楽座 合同説明会

4月18日(木)、19日(金) 16:30-19:00

内容
近江楽座有志チームが各ブースにて活動紹介を行います。実際に地域に出て活動している学生と直接話ができ、気になる活動について情報をたくさん得ることができます。当日は2018年度に活動した全チームの成果がわかる活動報告展も同時開催!

会場
交流センターホワイエ

現在近江楽座では様々な活動を行う全24チームが各地域で活動中!

今しかできること、県大だからできること、見つけませんか?

近江楽座 <http://ohmirakuza.net/>

"近江楽座や近江楽座チームをもっと知ってもらおう!"、"活動に興味を持ってもらおう!"という目的から、近江楽座学生委員会の呼びかけにより、14の有志チームによる近江楽座説明会が開催されました。

| 学生委員会とは

近江楽座を更に推進していくために、チーム間の交流・連携を目的として発足した有志学生による組織です。2006年に、当時のプロジェクトチームの代表経験者が中心となり結成されました。学部・学科・プロジェクトの枠を超えて活動の輪を広げ、地域活性化に貢献するためのネットワーク形成を目指し、学生ならではの視点で近江楽座をサポートしています。

| 楽座市

日 時：2019年4月18日(木)、19日(金)

16:30~19:00

会 場：交流センターホワイエ

開催内容：

- ブース相談会
- 2018年度全チームの活動報告新聞の展示
- 活動写真展

<参加チーム>

- ・あかりんちゅ
- ・スチューデント・キュレイターズ
- ・とよさと快蔵プロジェクト
- ・子ども学習支援サポーターズ
- ・かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-
- ・田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
- ・ボランティアサークル Harmony
- ・Taga-Town-Project
- ・おとくらプロジェクト
- ・政所茶レン茶
- ・とよさらだプロジェクト
- ・座・沖島
- ・滋賀県大生き物研究会
- ・信・楽・人 -shigaraki field gallery project-

例年より多くの学生の参加があり、賑やかな説明会となりました。それぞれのブースでは活動の様子を写した写真や活動の中で作成した成果物を使って、自分達の活動をアピールしました。

会場の交流センターホワイエでは活動報告展と活動写真展も開催しており、2018年度に活躍した全てのチームについて知ってもらう機会となりました。



会場の様子



ブースで活動を説明



パンフレットや成果物を見ながら活動を紹介



活動報告新聞を眺める参加者

4-2 オープンキャンパス

日 時：2019年7月20日(土)、21日(日)

9:00～15:00

会 場：交流センターホワイエ

開催内容：

- 学生による活動紹介、相談会
- ムービーでの活動紹介
- 活動展示

<参加チーム>

- ・とよさと快蔵プロジェクト
- ・田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
- ・Taga-Town-Project
- ・政所茶レン茶[®]
- ・とよさらだプロジェクト
- ・座・沖島

オープンキャンパスでは交流センターのホワイエにて近江楽座の紹介を行いました。有志で実際に近江楽座チームで活動を行っている学生がブースに立ち、来場者に活動をアピールしました。



来場者に活動の説明を行う



会場の様子

4-3 近江楽座チャレンジショップ

日 時：2019年7月1日(月)、8日(月)、
22日(月)、29日(月) 11:30-13:30

会 場：学生ホール

7月の月曜日に有志のチームが成果物の販売や展示を行いました。学生ホールで行い、より多くの学生や教職員に活動を知ってもらう機会となりました。

<7月1日参加チーム>

- ・とよさらだプロジェクト(無農薬野菜の販売)
- ・政所茶レン茶[®]ー(お茶の販売、試飲)

<7月8日参加チーム>

- ・とよさらだプロジェクト(無農薬野菜の販売)
- ・政所茶レン茶[®]ー(お茶の販売、試飲)

<7月22日参加チーム>

- ・とよさらだプロジェクト(無農薬野菜の販売)
- ・政所茶レン茶[®]ー(お茶の販売、試飲)
- ・田の浦ファンクラブ学生サポートチーム(田の浦のわかめの販売)
- ・Taga-Town-Project(多賀の写真展示)

<7月29日参加チーム>

- ・とよさらだプロジェクト(無農薬野菜の販売)
- ・政所茶レン茶[®]ー(お茶の販売、試飲)
- ・田の浦ファンクラブ学生サポートチーム(田の浦のわかめの販売)



会場の様子



お茶と野菜の販売



写真展示

4-4 イナズマロックフェス「おいで～な滋賀」体験フェア ブース出展

日 時：2019年9月21日(土)、22日(日)

会 場：烏丸半島芝生広場(草津市)

滋賀ふるさと観光大使の西川貴教さんが主催されているイナズマロックフェス2019が開催され、あかりんちゅと政所茶レン茶[®]ーが「おいで～な滋賀 体感フェア」のブースに出展しました。

あかりんちゅは21日、政所茶レン茶[®]ーは両日出展をしました。

あかりんちゅはリサイクルキャンドルの販売とキャンドル作り体験を行い、キャンドル作り体験は途中で体験に使用する材料が足りなくなりほど、多くの人に体験いただけたそうです。

政所茶レン茶[®]ーは自分たちで育てた政所茶の販売と試飲を行いました。試飲は煎茶、番茶、焙じ茶の3種類を用意されていて、試飲された方はどれを飲もうか悩みながらも政所茶を楽しんでいただけました。

また無料エリアにある龍神ステージに出演し、それぞれの活動を来場者にアピールしました。

お立ち寄りいただきました皆さま、ありがとうございました。

イナズマロックフェス2019「おいで～な滋賀」体感フェアに出展した様子はプロジェクトレポート第1号でも紹介しています。

http://ohmirakuza.net/wp-content/uploads/publish/19_report.pdf



ブースの様子(あかりんちゅ)



政所茶の試飲の様子(政所茶レン茶[®]ー)



政所茶レン茶[®]ーが龍神ステージに出演

4-5 B プロジェクト「県営開出今団地コミュニティ再生プロジェクト」

滋賀県と協定を締結し、県営住宅の空き住戸を活用して地域コミュニティの活性化を図る取組を進めました。活動は3つの柱からなり、1つがシェアハウス。学生が実際に暮らしながら地域と関わる活動を進めました。2つ目が、学生活動の拠点「楽座ルーム」の利用・運営。3つ目は、地域に向けてのイベントの開催です。今年度は、残念ながらイベントは実施できませんでした。

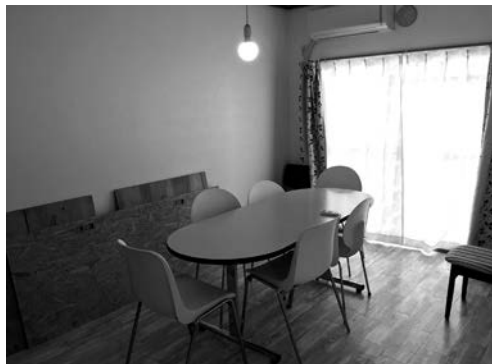
| シェアハウス

4名の学生が1年間県営住宅団地で生活し、年2回の草むしりや階段清掃等の共同活動、町内会費の集金などの活動を行いました。日頃のあいさつやおすそ分けをもらったり、子どもの遊び相手になったりするなど、近所付き合いを通して、団地での生活に馴染んでいる様子が伺えました。

住んでいる学生からフリーマーケットなど、もう少しイベントが行えると良いかもしれないという声も上がっています。

| 「楽座ルーム」の利用・運営

年間、34回の利用があり、うち31回は近江楽座の各プロジェクトが会議や制作、イベント準備、交流、荷物搬入等で利用し、3回が部屋の維持管理や環境整備を行いました。



ミーティングルーム



キッチン
商品開発・イベント準備などに活用

5 他大学等との交流

5-1 LINKtopos2019 in Kochi

日 時：2019年9月3日(火)、4日(水)、
5日(木)

場 所：高知県立幡多青少年の家、
大方あかつき館(高知県幡多郡黒潮町)

9月の3日間に全国公立大学学生大会LINKtopos2019 in Kochiが開催され、とよさと快蔵プロジェクトから1名と田の浦ファンクラブ学生サポートチームから3名が参加しました。

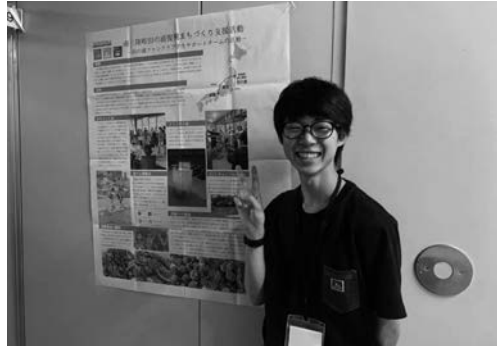
LINKtoposは地域活動を行っている公立大学の学生が全国から集まり、ワークショップ等を通して交流を図るもので、LINKtopos2019のテーマは「共創～それぞれの一步先に～」。

ポスターセッションで自身の活動を紹介したり、ワークショップで防災・減災について意見を交わしたりと、他大学の学生とお互いの活動や課題について話し合いました。

| スケジュール

- 9/3 オリエンテーション
ポスターセッション
- 9/4 黒潮町町長講演
フィールドワーク(佐賀地区津波避難タワー、
大和田山避難広場)
ワークショップ
- 9/5 ワークショップ成果物発表
地区別ワークショップ

2020年3月にはLINKtopos2019 in Kochiに参加した学生を中心に近畿LINKtoposを滋賀県立大学で開催する企画が進められていましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となりました。



ポスターセッションで活動について報告



フィールドワークで津波避難タワーを見学



防災についてのワークショップでアイデアを出し合う

5-2 スタディツアー〈下川町× JAL〉を実施（大学SDGs ACTION AWARDS2019）

日 時：2019年9月27日（金）、28日（土）

大学 SDGs ACTION! AWARDS 2019 で、スタディツアー〈下川町× JAL〉賞を受賞したとよさと快蔵プロジェクトが、9月27、28日の二日間にわたり、北海道下川町の取組について、現地では学ばせていただきました。

第1回ジャパン SDGs アワードの内閣総理大臣賞を受賞した下川町では、林業を主要産業のひとつとし、循環型森林経営に積極的に取り組んでおり、“森林資源を余すことなくつかう”ことを目標に町内で様々な事業が展開されています。

今回のツアーでは、「バイオマス原料製造施設」「フプの森」「エコハウス美桑」「一の橋バイオビレッジ」「万里フレペ」「美桑が丘」「共立トラスト」の7施設を見学。

北海道下川町という本州とはまた違った環境で、自然と町と人が一体となった取組をしていることに新鮮な印象を受け、モノづくりのもととなる自然素材やその生かし方、デザインのことなど、大いに勉強になりました。また、慶應義塾大学の学生がインターンで町に入り、SDGsの広報を担当しており、大学生同士、交流させていただきました。

今回のツアーをきっかけとして、とよさと快蔵プロジェクトとしても活動の幅を一層広げていけるよう取り組んでいきます。

〈大学 SDGs ACTION! AWARDS 2019〉

国連が掲げる「持続可能な開発目標（SDGs）」の達成に向け、次代を担っていく若者の活動を後押しするため、朝日新聞社が「大学 SDGs ACTION! AWARDS」を創設。

第2回目となる2019の大会において、とよさと快蔵プロジェクトが「SDGs 移動仮設カフェ〈出張タルタルーガ〉の展開」でスタディツアー〈下川町× JAL〉賞を受賞。



エコハウス美桑を見学



美桑が丘を訪れる

5-3 びわ湖環境ビジネスメッセへの出展

日 時：2019年10月16日(水)、17日(木)、
18日(金)

場 所：長浜バイオ大学ドーム

令和元年10月に開催されたびわ湖環境ビジネスメッセに4チームが出展しました。

| 出展ブース・出展チーム

① SDGs コーナー

- ・とよさと快蔵プロジェクト
- ・政所茶レンジャー

② 彦根・長浜地域における大学・短期大学・地域連携プラットフォーム

- ・廃棄物バスターズ
- ・フラワーエネルギー「なの・わり」

とよさと快蔵プロジェクトは大学 SDGs ACTION! AWARDS 2019 での提案内容である SDGs 移動仮設店舗を製作し、会場出張タルタルーガの展示を行いました。また出張タルタルーガを使って、政所茶レンジャーが来場者に政所茶を提供しました。

廃棄物バスターズはチームで開発したプラスチックを再利用したりサイクルプランター、フラワーエネルギー「なの・わり」は自分たちで栽培した菜の花から作った菜種油とバイオディーゼル燃料を展示し、それぞれの活動についてポスター展示・発表を行いました。

当日はチームのメンバーがそれぞれのブースに立ち、自分たちの活動について来場者に説明し、活動をPRしました。



来場者に展示について説明する



廃棄物バスターズとフラワーエネルギー「なの・わり」のメンバー



廃棄物バスターズとフラワーエネルギー「なの・わり」の展示ブース

5-4 2019 地域活性化フォーラム in しが

日 時：2019 年 10 月 19 日 (土)

場 所：野洲文化小劇場

野洲市で開催された連合滋賀主催の「2019 地域活性化フォーラム in しが～SDGs 目標より私たちが滋賀で取り組むこと～」にタクロバン復興支援プロジェクト代表の大野宏さんがパネラーとして参加し、フィリピンのタクロバンで取り組む建物から暮らしをつくるプロジェクトの活動について、滋賀県立大学の SDGs と近江楽座の取組を含め、報告しました。



会場の様子



パネリスト (左から 4 番目が大野宏さん)



活動について報告

パネルディスカッションでは、三日月滋賀県知事も参加し、SDGs と滋賀での取組について、議論を深めました。

日 時：2020年2月19日(水)

滋賀県公館で三日月知事と廣川理事長立ち合いのもと近江楽座(政所茶レン茶[®]ー)が政所茶生産振興会(東近江市)と、近江楽座(座・沖島)が沖島町離島振興協議会(近江八幡市)と地域の活性化に向けた協定を締結しました。

しがのふるさと支え合いプロジェクトは、人口減少、高齢化、耕作放棄地の増加等がいち早く進む中山間地域の活性化を目的に、農村集落と企業や大学、NPO法人等多様な主体が協定を締結して行う農地保全活動や都市農村交流等の取組を滋賀県が支援するもので、2018年度から始まりました。

2019年度は、本学関係の2協定を含め4つの協定が締結され、協定締結式の後、地域の方々と大学・学生との意見交換が行われました。

Ⅰ 協定内容

政所茶生産振興会(東近江市)

ー滋賀県立大学・近江楽座(政所茶レン茶[®]ー)

日本茶の原風景を伝える政所地域において、学生の地域活動チーム「政所茶レン茶[®]ー」が耕作放棄地等で茶の栽培を行うとともに、茶の販売・PR活動を通じ、地域活性化に貢献する。



政所茶レン茶[®]ーと協定関係者

沖島町離島振興協議会(近江八幡市)

ー滋賀県立大学・近江楽座(座・沖島)

過疎化が問題になっている沖島において、学生の地域活動チーム「座・沖島」が地域行事への支援や農水産物の販売・PR活動を行い、島の振興に貢献する。



座・沖島と協定関係者

5-6 第9回毎日地球未来賞 奨励賞を受賞

たけともミライが「滋賀県立大学陶器浩一研究室+たけともミライ」として第9回毎日地球未来賞の奨励賞を受賞しました。

毎日地球未来賞は、未来の子どもたちに良好な環境を残すため、「食料」「水」「環境」の分野で、国内外の問題解決のために地道に取り組んでいる草の根的な市民団体や、中高生・大学生など若い人たちの活動を表彰するものです。

東日本大震災の被災地、宮城県気仙沼市で、学生が切り出した竹 1000 本を使って「竹の会所」をつくり、地域の人たちと交流し、放置竹林を活用した地域づくりに取り組んだこと。滋賀県湖南市では「生きる自然は地域を育む」をテーマに活動し、伐採した竹で遊具や遊歩道を作るなど遊び場を整備。これらの活動が認められ、奨励賞を受賞しました。



陶器浩一教授とたけともミライのメンバー



竹の会所



情報発信

6-1 ホームページ、プロジェクトレポート、リーフレット

| 近江楽座ホームページの運営

URL : <http://ohmirakuza.net/>

滋賀県立大学における、学生の地域活動に関するポータルサイトでもある近江楽座ホームページの運営を行い、随時最新情報を更新しています。

<追加コンテンツ>

○ 楽座文庫

過去の「近江楽座 活動報告書」、「活動紹介リーフレット(英語版)」等を追加

| プロジェクトレポート

事務局スタッフが、実際にプロジェクトの現場を訪れ、活動レポートを作成・発行しました。2019度は計2号発行。3チームの活動取材しました。発行したレポートは、学内食堂前にある近江楽座掲示板に掲示。近江楽座のホームページにも掲載しています。

<2019年度プロジェクトレポート>

- [あかりんちゅ・政所茶レン茶¹]
- [未来看護塾]



プロジェクトレポート
(第1号:あかりんちゅ・政所茶レン茶¹)
(第2号:おとくらプロジェクト)

| 活動紹介リーフレット2019

デザイン:福元美希

取材協力:青柳光哉、伊藤巴瑠加

近江楽座プロジェクトで活動する学生に依頼し、近江楽座全体の取組や、2019年度近江楽座に採択されたAプロジェクト22件とBプロジェクト1件を写真入りで紹介するリーフレットを作成しました。リーフレットのデザインと近江楽座OB・OGにインタビューした「-VOICE-先輩の声」の取材は近江楽座で活動する学生に協力いただきました。



近江楽座活動紹介リーフレット2019

6-2 東洋経済 ACADEMIC SDGs に取り組む大学特集

東洋経済新報社が企画、編集を行った『東洋経済 ACADEMIC SDGs に取り組む大学特集』が7月12日に発売されました。

なぜ大学がSDGsに取り組むのか。どのような力をもつのか。取組とともに、評価軸としてのSDGsをビビッドに紹介するもので、未来を創る20の大学の実践のひとつとして、滋賀県立大学の取組と卒業生の活動が紹介されています。

滋賀県立大学の取組が紹介されているページでは近江楽座全体についてと、タクロバン復興支援プロジェクト、座・沖島が取り上げられています。

「SDGs Front Runners — SDGsの現場で活躍する大学生と卒業生 —」の特集では卒業生でとよさと快蔵プロジェクトでも活躍していた中野優さんが紹介されています。

滋賀県立大学の取組と卒業生の活動が紹介されたページは近江楽座ホームページ (<http://ohmirakuza.net/information/keisai1907/>) に掲載しています。



『東洋経済 ACADEMIC SDGs に取り組む大学特集』表紙



『東洋経済 ACADEMIC SDGs に取り組む大学特集』滋賀県立大学の取組が紹介されているページ

7 付録



7-1 プログラム推進メンバー※

事業推進代表者

滋賀県立大学理事長 廣川能嗣

事業推進責任者

近江楽座専門委員会 委員長 印南比呂志

近江楽座専門委員会

環境科学部

浦部美佐子

林宰司

村上修一

金子尚志

迫田正美

工学部

河崎澄

柳澤淳一

人間文化学部

石川慎治

武田俊輔

印南比呂志

佐々木一泰

人間看護学部

伊丹君和

横井和美

地域共生センター

鵜飼修

近江楽座事務局

秦憲志

前川瑛美梨

高谷美穂

※ 2019 年度 (2020 年 3 月末時点)

このほか、近江楽座に関わり支援いただいたすべての方にお礼申し上げます。

7-2 メディア掲載一覧

No	日 時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
1	2019.7	あかりんちゅ	県大 jiman2019 第 25 号 JULY	After School Report 近江楽座 あかりんちゅ
2	2019.12.3	あかりんちゅ	中日新聞	キャンドルアートやイルミ点灯で華やぐ 大垣でイベント
3	2019.4.11	とよさと快蔵プロジェクト	夢けんせつ春号	プロジェクト取材 「地域とつながる滋賀の学生たちの取り組み」
4	2019.4.26	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	地酒 30 種 利き酒を 豊郷の岡本本家であず、28 日酒蔵祭り
5	2019.8.24	とよさと快蔵プロジェクト	しが彦根新聞	旧豊郷小でお化け屋敷 31、1 日 30 組限定
6	2019.8	とよさと快蔵プロジェクト	広報とよさと 8 月号	どろんこまつり 参加者大募集!!
7	2019.8.28	とよさと快蔵プロジェクト	京都新聞	恐怖の旧豊郷小から脱出せよ! 町観光協、31 日からお化け屋敷
8	2019.9.25	とよさと快蔵プロジェクト	こんきくらぶ 10 月号	豊郷町の今と向き合う若者たち
9	2019.10	とよさと快蔵プロジェクト	広報とよさと 10 月号	田んぼの中へダイブ! 雨降野どろんこ祭り
10	2019.12.10	とよさと快蔵プロジェクト	朝日新聞	冬の豊郷をゆく 空き家を「快蔵」笑顔集う場に
11	2019.12.20	とよさと快蔵プロジェクト	朝日新聞 DIALOG	大学 SDGs ACTION! AWARDS 受賞者レポート
12	2019.7.7	子ども学習支援サポーターズ	滋賀民報	「子ども学習支援サポーターズ」“こどもの居場所を”
13	2019.8.2	廃棄物バスターズ	FM おおつ ランチタイム おおつ	「廃棄物バスターズの文化」
14	2019.11.20	廃棄物バスターズ	中日新聞	犬上川河口で清掃 プラごみ問題実感 県立大生と積水化工
15	2019.7.27	かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-	しが彦根新聞	上岡部ヒョウタンで初出店 県大生の団体 はし置きなど作り
16	2020.1.28	かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-	中日新聞	古民家で地域住民とパーティー 中国人留学生とビンゴ
17	2020.1.29	かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-	しが彦根新聞	古民家で県大生と子どもが交流 上岡部で恵方巻や豆移しゲームなど
18	2019.8.12	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	南三陸なう	【36NEWS】2019.08.11 海の大運動会
19	2019.8.11	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	宮城テレビ放送 every.	若い力で地域を元気に! 「海の大運動会」
20	2019.8.12	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	河北新報	被災者と支援者、海の交流楽しむ 南三陸で大運動会
21	2020.3.12	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	中日新聞	復興支援これからも 県大生「田の浦を元気に」
22	2020.3.14	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	しが彦根新聞	被災地 田の浦へ「鎮魂の祈り」 県大生 10 人キャンドル灯し黙とう

No	日時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
23	2020.2	タクロバン復興支援プロジェクト	後援会会報「はっさか」第50号	学生インタビュー 留学のかたち
24	2019.11.25	ボランティアサークル Harmony	京都新聞	ハーモニー & メロディー クリスマスコンサート 障がい児・者とともに集う音楽会
25	2019.12.1	ボランティアサークル Harmony	中日新聞	障がい児らと楽しくダンス 県立大 ボランティアら音楽祭
26	2020.2.13	Taga-Town-Project	中日新聞	みそ汁のだし 奥深い 食育ワークショップで指導
27	2019.6.25	おとくらプロジェクト	中日新聞	心の葛藤や情熱 絵筆に
28	2019.7.18	おとくらプロジェクト	中日新聞	国内外の作家 多彩な芸術作品 愛荘・藤居本家で10人展
29	2019.11.28	おとくらプロジェクト	朝日新聞	第9回 おとくら寄席
30	2019.12.7	おとくらプロジェクト	しが彦根新聞	高宮で落語寄席 8日
31	2020.1.19	おとくらプロジェクト	県政報告 滋賀県議会議員	Activities おとくら10周年記念パーティー
32	2020.2.20	おとくらプロジェクト	彦根市立高宮小学校ホームページ	学校生活 (2020/02/20)
33	2019.6.22	政所茶レン茶会	京都新聞	政所茶味わって あす東近江で催し
34	2019.4.1	たけともミライ	新建築	3月10日に展覧会「竹の会所の歩み」を気仙沼市・竹の会所で開催
35	2019.4.17	たけともミライ	建築学会	人と共に歩み、人に『笑顔』と『学び』を与えた建築
36	2020.1.9	たけともミライ	毎日新聞	人つなぐ「竹」の会所 県立大陶器浩一研究室 + たけともミライ 毎日地球未来賞 奨励賞
37	2020.1.18	たけともミライ	毎日新聞	高校・大学5団体も講演 地球未来賞 来月15日表彰
38	2020.3.21	たけともミライ	毎日新聞	第9回毎日地球未来賞奨励賞 竹で建造物人と人つなぐ
39	2020.2.28	座・沖島	季刊リトケイ31号	島と大学とSDGs
40	2020.2.21	座・沖島、政所茶レン茶会	中日新聞	中山間地活性化へ若者目線 4地区で集落と大学が協定結ぶ
41	2020.3.22	座・沖島、政所茶レン茶会	中日新聞	中山間地域「支え合いプロジェクト」大学、企業との連携 2年目に
42	2020.2.20	座・沖島、政所茶レン茶会	iJUMP	中山間地活性化で協定= 4地区と3大学-滋賀県
43	2020.2.21	座・沖島、政所茶レン茶会	京都新聞	中山間地域の活性化を 県内4地区と大学が協定
44	2020.2.25	座・沖島、政所茶レン茶会	日本農業新聞	滋賀 「支え合いプロジェクト」 4地区が協定締結
45	2019.4.24	近江楽座	ZTV 彦根放送局 「おうみ!かわら版彦根」	近江楽座 活動報告会 (2019年4月24日更新号)

公立大学法人 滋賀県立大学
「近江楽座」

2019 年度活動報告書

2021 年 3 月発行

発行	公立大学法人 滋賀県立大学 地域共生センター 〒 522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500 TEL. 0749-28-8616 FAX. 0749-28-8473
企画・編集	近江楽座事務局
印刷・製本	近江印刷株式会社
構成・デザイン	前川瑛美梨

本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製、転載することは禁止されています

最新情報は、近江楽座ホームページ：<http://ohmirakuza.net/> をぜひ御覧ください

近江楽座